

大和路・信濃路（堀辰雄）

樹下

その藁屋根の古い寺の、木ぶかい墓地へゆく小径のかたわらに、一体の小さな苔蒸した石仏が、笹むらのなかに何かしおらしい姿で、ちらちらと木洩れ日に光って見えている。いずれ観音像かなにかだろうし、しおらしいなどとはもつてのほかだが、——いかにもお粗末なもので、石仏といつても、ここいらにはさらにある脆い焼石、——顔も鼻のあたりが欠け、天衣などもすっかり磨滅し、そのうえ苔がほとんど半身を被ってしまったているのだ。右手を頬にあてて、頭を傾げているその姿がちよっとおもしろい。一種の思惟象とでもいふべき様式なのだろうが、そんなむずかしい言葉でその姿を言ひあらわすのはすこしおかしい。もうすこし、何んといったらいいか、無心な姿勢だ。それを拝しながら過ぎる村人たちだつて、彼等の日常生活のなかでどうかした工合でそういった姿勢をしていることもあるかも知れないような、親しい、なにげなさなのだ。……そんな笹むらのなかの何んでもない石仏だが、その村でひと夏を過ごしているうちに、いつかその石仏のあるあたりが、それまで一度もそういったものに心を寄せたことのない私にも、その村での散歩の愉しみのひとつになった。ときどきそこいらの路傍から採ってきたような可憐な草花が二つ三つその前に供えられてあることがある。

村の子供らのいたずらしい。が、そんなのではない、もうすこしちゃんとした花が供えられ、お線香なども上がっていたことも、その夏のあいだに二三度あった。

「お寺の裏の笹むらのなかに、こう、ちよっとおもしろい恰好をした石仏があるでしょう？ あれはなんでしょうか？」夏の末になって、私はその寺のまだ四十がらみの、しかしもう鋭く痩せた住職からいろいろ村の話を聴いたあとで、そう質問をした。

「さあ、わたしもあの石仏のことは何もきいておりませんが、どういう由緒のものですかな。かたちから見ますと、まあ如意輪観音にちかいものかと思いますが。……何しろ、ここいらではちよっと類のないもので、おそらく石工がどこかで見覚えてきて、それを無邪気に真似でもしたのではないでしようか？……」

「そういうこともあるんですか？ それはいい。……」私にはその説がすっかり気に入った。たしかに、その像をつくったものは、その形相の意味をよく知っていてそう造ったのではない。ただその形相そのものに対する素朴な愛好からそういうものを生んだのだ。そうしてその故に、——そこにまだわずかにせよ残っているかも知れない原初の崇高な形相にまで、私のようなものの心をあくがれしめるのであろうか？ こんないかにもなにげない像ですら。……

「ときどきお花やお線香などが上がっているようですが、村

の人たちはあの像にも何か特別な信仰をもっているのですか？」

最後に私はそんなこともきいてみた。

「さあ、それもいつごろからの事だか知りませんが、わりに近頃になってからだそうですが、齒を病む子をつれて、村の年よりもがよく拝みに来ます。」そういつてその住職は笑った。

「あの指先で頬を支えている思惟の相が、村びとはなんのことやら分からなくなつて、いつかそんな俗信を生むようになったと見えますな。」

「それはいくら何んでも……」そう言いかけたが、しかしそのまま私は口をつぐんで、これから秋になって、夜ごとに虫がすだいて啼きはじめるあの笹むらのなかで、相変らず、じいっと小さな頭を傾げているだろうその無心そうな像を、ふいと目のうちに蘇よみがえらせた。いつのまにこの像がこんなに自分にとつて親しみのあるものになつてしまつたのだろうと訝いぶかりながら。……

それから数年立つて、私もときどき大和のほうへ出かけては、古い寺や名だかい仏像などを見て歩いたりするようになったが、そんな旅すがら、路傍などによく見かける名もない小さな石仏のようなものにも目を止めるようにしていた。そういうものの中には私の心を惹くようなものもかなりあるにはあつたが、数年前信濃の山のべの村で見つけたあんなよう

な味わいのあるものは一つも見出せなかった。そして、私はときどきあの笹むらのなかで小さな頭を傾げていた観音像を好んで思いだしていた。もとより旅にあってはほどよく感傷的になるのも好いとおもっている私のことだから、それが単なる自己の感傷に過ぎなくても、それもそれで好いとおもっていた。

云つてみれば、それはそれまで何年かその山ちかい村で孤独に暮らしていた自分をもその一部とした信濃そのものに対する一種のなつかしさでもあらうし、又、こうやって大和の古びた村々をひとりでさまよい歩いているいまの自分の旅すがたは旅すがたで、そんな数年前の何か思いつめていたような自分がそういつたはかないものにまで心を寄せながら、いつかそれを通してひそかにあくがれていたものでもあつたのであらう。ともかくも、その笹むらのなかの小さな思惟像は、何かにつけて、旅びとの私にはおもい出されがちだった。

或る秋の日にひとりで心ゆくまで拝してきた中宮寺ちゅうぐうじの観音像。——その観音像の優しく力づよい美しさについては、いまさら私なんぞの何もうことではない。ただ、この観音像がわれわれをかくも惹きつけ、かくも感嘆せしめずにはおかない所以ゆえんの一つは、その半跏思惟はんかしゆいの形相そのものであると説かれた浜田博士の闊達かつたうな一文は私の心をいまだに充たしている。その後も、二三の学者のこの像の半跏思惟の形の発生を考察した論文などを読んだりして、それがはるかにガンダラ

の樹下思惟像あたりから発生して来ているという説などもあることを知り、私はいよいよ心に充ちるものを感じた。

あのいかにも古^{アルカイック}拙^拙なガンダラの樹下思惟像——仏伝のなかの、太子が樹下で思惟^{しゆい}三昧^{さんまい}の境にはいられると、その樹がおのずから枝を曲げて、その太子のうえに蔭をつくったという奇蹟を示す像——そういう異様に葉の大きな一本の樹を装飾的にあしらった、浅浮雕りの、数箇の太子思惟像の写真などをこの頃手にとって眺めたりしているときなど、私はまた心の一隅であの信濃の山ちかい村の寺の小さな石仏をおもい浮かべがちだった。

一つの思惟像^{しゆいざう}として、瞑想^{めいさう}の頬杖^{ほえだ}をしている手つきが、いかにも無様^{ぶざま}なので、村人たちには怪しい迷信をさえ生じさせていたが、——そのうえ、鼻は欠け落ち、それに胸のあたりまで一めんに苔^{こけ}が生えていて、……そういうえば、そんなにそれが苔づくほど、その石仏のあるあたりは、どんな夏の日ざかりにもいつも何かひえびえとしていて、そこいらまで来ると、ふいと好い気もちになってひとりで足も止まり、ついそのままその笹むらのなかの石仏の上へしばらく目を憩^{やすみ}わせる。と、苔の肌はしっとりとしている。ちょっとそれを撫でてみたくなるような見事さで。——そう、いまのいままでそれに気がつかなかったのは、いや、気がついていてもそれを何とも思わずにいたのは随分迂闊^{うかつ}だが、あそこは何かの大きな樹の下だったにちがいない。——すこし離れてみなければ、それが何んの樹だかも分らないほどの大きな樹だったのだ。あの頬杖^{ほえだ}をしている小さな石仏のうえにちらちらしていた木洩れ日も、よほど高いところから好い工合に落ちてきていたので、あんなに私を夢み心地にさせたのだったろう。あれは一体、何んの樹だったのだろうか？……そんなことをおもいながら、私はふと樹下思惟という言葉を、その言葉のもつ云いしれずなつかしい心像を、身にひしひしと感じた。あれは一体、何んの樹？……だが、あの大きな樹の下で、ひとり静かに思惟にふけていたもの——それはあの笹むらのなかに小さな頭を傾^かげていた石仏だったろうか？ それとも、それに見入りながらその怪しげな思惟像をとおしてはるか彼方のものに心を惹^ひかれていた私のほうではなかったろうか？

それにしても、あそこには、——あの何やらメルヘンめいた石仏の前には、いまだにあの愚かな村びとどもの香花が絶えないだろうか？ 子供たちがそこいらの路傍から摘んでくるかわいらしい草花だけならいいが……

十月

一

一九四一年十月十日、奈良ホテルにて

くれがた奈良に著いた。僕のためにとつておいてくれたのは、かなり奥まった部屋で、なかなか落ちつけそうな部屋で好い。すこうし仕事をするのには僕には大きすぎるかなと、もうここで仕事に没頭している最中のような気もちになって部屋の中を歩きまわってみたが、なかなか歩きがある。これもこれでよかろうという事にして、こんどは窓に近づき、それをあけてみようとして窓掛けに手をかけたが、つい面倒になって、まあそれくらいはあすの朝の楽しみにしておいてやれとおもって止めた。その代り、食堂にはじめて出るまえに、奮発して髭を剃ることにした。

十月十一日朝、ヴェランダにて

けさは八時までゆっくりと寝た。あけがた静かで、寝心地はまことにいい。やっと窓をあけてみると、僕の部屋がすぐ荒池に面していることだけは分かったが、向う側はまだぱおと濃い靄につつまれてるつきりで、もうちょっと僕にはお預けという形。なかなかもったいぶつていやあがる。さあ、この部屋で僕にどんな仕事出来るか、なんだかこう仕事を

目の前にしながら嘘みたいに愉しい。きょうはまあ軽い小しらべに、ホテルから近い新薬師寺ぐらいのところでも歩いて来よう。

夕方、唐招提寺にて

いま、唐招提寺の松林のなかで、これを書いている。けさ新薬師寺のあたりを歩きながら、「城門のくづれてゐるに馬酔木かな」という秋桜子の句などを口ずさんでいるうちに、急に矢も楯もたまらなくなつて、此処に来てしまった。いま、秋の日がぱい金堂や講堂にあたつて、屋根瓦の上にも、丹の褪めかかった古い円柱にも、松の木の影が鮮やかに映っていた。それがたえず風にそよいでいる工合は、いうにいわれない爽やかさだ。此処こそは私達のギリシアだ——そう、何か現世にこせこせしながら生きているのが厭になつたら、いつでもいい、ここに来て、半日なりと過ごしていること。——しかし、まず一番先きに、小説なんぞ書くのがいやになつてしまふことは請合いだ。……はっはっは、いま、これを読んでいるお前の心配そうな顔が目に見えるようだ。だが、本当のところ、此処にこうしていると、そんなはかない仕事にかかわっているよりか、いっそのこと、この寺の講堂の片隅に埃だらけになつて二つ三つころがつている仏頭みたいに、自分も首から上だけになつたまま、古代の日々を夢みていたくなる。……

もう小一時間ばかりも松林のなかに寝そべって、そんなはかないことを考えていたが、僕は急に立ちあがり、金堂の石壇の上に登つて、扉の一つに近づいた。西日が丁度その古い

扉の上にあたっている。そしてそこには殆ど色の褪めてしまった何かの花の大きな文様もようが五つ六つばかり妙にくっきりと浮かび出ている。そんな花文のそこに残っていることを知ったのはそのときがはじめてだった。いましがた松林の中からその日のあたっている扉のそのあたりになんだか綺麗な文様らしいものの浮き出ているのに気がつき、最初は自分の目のせいかと疑ったほどだった。――僕はその扉に近づいて、それをしげしげと見入りながらも、まだなんとなく半信半疑のまま、何度もその花文の一つに手でさわってみようとしかけて、ためらった。おかしいことだが、一方では、それが僕のものときまりの幻であってくればいいというような気もしていたのだ。そのうちその扉にさしていた日のかげがすうと立ち去った。それと一しよに、いままで鮮やかに見えていたそのいくつかの花文も目のまえで急にぼんやりと見えにくくなってしまった。

十月十二日、朝の食堂で

けさはもう六時から起きている。朝の食事をするまえに、大体こんどの仕事のプランを立てた。とにかく何処か大和の古い村を背景にして、Idy 風なものが書いてみたい。そして出来るだけそれに万葉集的な気分を漂わせたいものだとおもふ。――ちょっと待った、お前は僕が何かというとすぐイデイルのようなものを書きたがるので、またかと思っていることだろう。しかし、本当をいうと、僕は最近ケーベル博士の本を読みかえたおかげで、いままでいい加減に使っていたそのイデイルという様式スタイルの概念をはじめではつきりと知った

のだよ。ケーベル博士によると、イデイルというのは、ギリシア語では「小さき絵」というほどの意だそうだ。そしてその中には、物静かな、小ぢんまりとした環境に生きている素朴な人達の、何物にも煩わせられない、自足した生活だけの描かれることが要求されている。……どうだ、分かったかい、僕がそれより他にいい言葉がなかったので半ば間にあわせに使っていたイデイルというのが、思いがけず僕の考えていたものとそっくりそのままなのだ。もうこれからは安心して使おう。いい訳語が見つかってくれればいいが（どうも牧歌なんぞと訳してしまつてはまずいんだ）……

さて、お講義はこの位にしておいて、こんどの奴はどんな主題にしてやろうか。なんしろ、万葉風となると、はじめの領分なのだから、なかなかおいそれとは手ごろな主題も見つかるまい。そのくせ、一つのものを考え出そうとすると、あれもいい、これもちょっと描けそうだ、と一ぺんにいろんなものが浮かんで来てしまつてしょうがない。

ままよ、きょうは一日中、何処か古京のあとでもぶらぶら歩きながら、なまじっかこっちで主題を選ぼうなどとしなくて、どいつもでもいい、向うでもって僕をつかまえるような工合にしてやろう。……

僕はそんな大様な気もちで、朝の食事をすませて、食堂おおようを出た。

午後、海竜王寺にて

天平時代の遺物だという転害門てがいもんから、まず歩き出して、法蓮ほうれんというちょっと古めかしい部落を過ぎ、僕はさもない気もち

そうに佐保路さおじに向い出した。

此処、佐保山のほとりは、その昔、——ざっと千年もまえには、大伴氏などが多く邸宅を構え、柳の並木なども植えられて、その下を往来するハイカラな貴公子たちに心ちのいい樹蔭をつくっていたこともあったのだそうだけれど、——いまは見たすかぎり茫々ぼうぼうとした田圃たんぼで、その中をまっ白い道が一直線に突っ切っているつきり。秋らしい日ざしを一ぱいに浴びながら西を向いて歩いていると、背なかが熱くなってきた苦しい位で、僕は小説などをゆつくりと考えているところではなかった。漸やつと法華寺村ほっけじむらに著ついた。

村の入口からちよつと右に外れると、そこに海竜王寺かいりゅうおうじという小さな廃寺がある。その古い四脚門の陰にはいつて、思わずほつとしながら、うしろをふりかえってみると、いま自分の歩いてきたあたりを前景にして、大和平やまくだいら一帯が秋の収穫を前にしていかにもふさふさと稲の穂波を打たせながら拡がっている。僕はまぶしそうにそれへ目をやっていたが、それからふと自分の立っている古い門のいまにも崩れて来そうなのに気づき、ああ、この明るい温かな平野が廃都の跡なのかと、いまさらのように考え出した。

私はそれからその廃寺の八重葎やえむぐらの茂った境内にはいつて往つて、みるかげもなく荒れ果てた小さな西金堂さいこんどう（これも天平の遺構だそうだ……）の中を、はずれかかった櫺子れんじごしにのぞいて、その天平好みの化粧天井裏を見上げたり、半ば剥落した白壁の上に描きちらされてある村の子供のらしい楽書を一つ一つ見たり、しまいには裏の扉口からそつと堂内に忍びこんで、磚せんのすき間から生えている葎までも何か大事そうに

踏まえて、こんどは反対に櫺子の中から明るい土のうえにくつきりと印せられている松の木の影に見入ったりしながら、そう、——もうかれこれ小一時間ばかり、此処でこうやって過ごしている。女の来るのを待ちあぐねている古いにしえの貴公子のようにわれとわが身を描いたりしながら。……

夕方、奈良への帰途

海竜王寺を出ると、村で大きな柿を二つほど買つて、それを皮ごと嚙かじりながら、こんどは佐紀山さきやまらしい林のある方に向つて歩き出した。「どうもまだまだ駄目だ。それに、どうしてこうおれは中世的に出来上がっているのだろう。いくら天平好みの寺だといったつて、こんな小っちゃな寺の、しかもその廃類はいらいした気分に、こんなにうつつを抜かしていたのでは。……こんな事では、いつまで立っても万葉気分にはいれそうにもない。まあ、せいぜい何処やらにまだ万葉の香りのうっすらと残っている伊勢物語風なものぐらいしか考えられまい。もっと思いきりうぶな、いきいきとした生活気分を求めなくては。……」そんなことを僕は柿を嚙り嚙り反省もした。僕はすこし歩き疲れた頃、やつと山裾の小さな村にはいつた。歌姫うたひめという美しい字名あざなだ。こんな村の名にしてはどうもすこし、とおもうような村にも見えたが、ちよつと意外だったのは、その村の家がどれもこれも普通の農家らしく見えないのだ。大きな門構えのなかに、中庭が広くとつてあつて、その四周に母屋も納屋も家畜小屋も果樹もならんでいる。そしてその日あたりのいい、明るい中庭で、女どもが穀物などを一ぱいに拡げながらのんびりと働いている光景が、ちよつ

とピサロの絵にでもありそうな構図で、なんとなく仏蘭西^{フランス}あたりの農家のような感じだ。

ちよつとその中にはいつて往つて、女のもと、その村の聞きとりにくいような方言かなんかで話がしてみたかったのだけれど、気軽にそんなことの出来るような性分ならいい。僕ときたひには、そうやって門の外からのぞいているところを女どもにちらつと見とがめられただけで、もうそこには居たたまれない位になるのだからね。……

気の小さな僕が、そうやって農家の前に立ち止まり立ち止まり、二三軒見て歩いてるうちに、急に五六人の村の子たちには立ちよられて、怪訝^{けげん}そうに顔をじろじろ見られだしたのは往生した。そのあげく、僕はまるでそんな村の子たちに追われるようにして、その村を出た。

その村はずれには、おあつらえむきに、鎮守の森があった、僕はとうとう追いつめられるように、その森のなかに逃げ込み、その木蔭でやつと一息ついた。

十月十三日、飛火野にて

きょうは薄曇つていたので、何処へも出ずに自分の部屋に引き籠^{こも}つたまま、きのうお前に送ってもらつた本の中から、希臘悲劇集^{ギリシア悲劇集}をとりだして、それを自分の前に据え、別にどれを読み出すということもなしにあちらこちら読んでいた。そのうち突然、そのなかの一つの場面が僕の心をひいた。舞台は、アテネに近い、或る村はずれの森。苦しい流浪の旅をつづけてきた父と娘との二人づれが漸つといまその森まで辿^{たど}りついたところ。盲いた老人が自分の手をひいている娘に向つ

て、「此処はどこだ」と聞く。旅やつれのした娘はそれでも老父を慰めるようにこたえる。「お父う様、あちらにはもう都の塔が見えます。まだかなり遠いようではございますが。ここでございますか、ここはなんだかこう神さびた森で。……」老いたる父はその森が自分の終焉^{しゅうえん}の場所であるのを予感し、此処にこのまま止まる決心をする。

その神さびた森を前にして、その不幸な老人の最後の悲劇が起ろうとしているらしいのを読みかけ、僕はおぼえず異様な身ぶるいをした。僕はしかしそのときその本をとじて、立ち上がった。このまま此の悲劇のなかには入り込んでしまつては、もうこんどの自分の仕事はそれまでだとおもつた。：

こういうものを読むのは、とにかくこんどの可哀らしい仕事がすんでからでなくては。——そう自分に言つてきかせながら、僕はホテルを出た。

もう十一時だ。僕はやつぱりこちらに來ているからには、一日のうちに何か一つぐらいはいいものを見ておきたくなつて、博物館にはいり、一時間ばかり彫刻室^{てうこくしつ}のなかで過ごした。こんなときにひとつ何か小品で心愉^{こころたの}しいものをじっくり味わいたいと、小型の飛鳥^{あすか}仏などを丹念に見てまわっていたが、結局は一番ながいこと、ちやうど若い樹木が枝を拡げるような自然さで、六本の腕を一ぱいに拡げながら、何処か遙かなところを、何かをこらえているような表情で、一心になつて見入っている阿修羅王^{あしゅらおう}の前に立ち止まっていた。なんというういういしい、しかも切ない目ざしだろう。こういう目ざしをして、何を見つめよとわれわれに示しているのだろうか。

それが何かわれわれ人間の奥ぶかくにあるもので、その一心な目ざしに自分を集中させていると、自分のうちにおのずから故しれぬ郷愁のようなものが生れてくる、——何かそういったノスタルジックなもののさえ身におぼえ出しながら、僕はだんだん切ない気もちになって、やつとのことで、その彫像をうしろにした。それから中央の虚空蔵菩薩こくぞうぼさつを遠くから見上げ、何かこらえるように、黙ってその前を素通りした。

夜、寢床の上で

とうとう一日中、薄曇っていた。午後もまたホテルに閉じこもり、仕事にもまだ手のつかないまま、結局、ソフォクレエスの悲劇を再びとりあげて、ずっと読んでしまった。

この悲劇の主人公たちはその最後の日まで何んという苦患くげんに充ちた一生を送らなければならないのだろう。しかも、そういう人間の苦患の上には、なんの変ることもなく、ギリシアの空はほがらかに拡がっている。その神さびた森はすべてのものを吸い込んでしまうような底知れぬ静かさだ。あたかもそれが人間の悲痛な呼びかけに対する神々の答えでもあるかのように。——

薄曇ったまま日が暮れる。夜も、食事をすますと、すぐ部屋にひきこもって、机に向う。が、これから自分の小説を考えようとすると、果して午後読んだ希臘悲劇ギリシアひげきが邪魔をする。あらゆる艱苦かんくを冒して、不幸な老父を最後まで救おうとする若い娘のりりしい姿が、なんとしても、僕の心に乗ってきてしまう。自分も古代の物語を描こうというなら、そういう気高い心をもった娘のすがたをこそ捉まえようと努力しなくて

は。……

でも、そういうもの、そういった悲劇的なものは、こんどの仕事ですんでのことだ、こんど、こちらに滞在中に、古い寺や仏像などを、勉強かたがた、僕が心愉こころたのしく書こうというのには、やはり「小さき絵」位がいい。

まあ、最初のプランどおり、その位のを心がけることにして、僕は万葉集をひらいたり埴輪はにわの写真を並べたりしながら、十二時近くまで起きていて、五つか六つぐらい物語の筋を熱心に立ててみたが、どれもこれも、いざ手にとって仔細しさいに見ていると、大へんな難物のように思えてくるばかりなので、とうとう観念して、寢床にはいった。

十月十四日、ヴェランダにて

ゆうべは少し寐ねられなかった。そうして寐られぬまま、仕事のことを考えているうちに、だんだんいくじがなくなってしまう。もう天平時代の小説などを工夫するのは止めた方がいいような気がしてきた。毎日、こうして大和の古い村や寺などを見ていたからって、おいそれとすぐそれが天平時代そのままの姿をして僕の中に蘇よみがえってくれるわけではないのだもの。それには、もうすこし僕は自分の土台をちゃんとしておかなくては。古代の人々の生活の状態なんぞについて、いまみたいにほんの少ししか、それも殆ど切れ切れにしか知っていないようでは、その上で仕事をするのがあぶなっかしくってしょうがない。それは、ここ数年、何かと自分の心をそちらに向けて勉強してきたこともしてきた。だが、あんな勉強のしかたでは、まだまだ駄目なことが、いま、こうやって

その仕事に実地にぶつかって見て、はつきり分かったというものだ。ほんの小手しらべのような気もちでとり上げようとした小さな仕事さえ、こんなに僕を手きびしくはねつけるのだ。僕はこのままそれに抵抗していても無駄だろう。いさぎよく引返して、勉強し直してきた方がいい。……

そんな自棄^{やけ}ぎみな結論に達しながら、僕はやっと明け方になってから寐入った。

それで、けさは大いに寐坊をして、髭^{ひげ}も剃^そらずに、やっと朝の食事に間に合った位だ。

きょうはいい秋日^{あきびより}和だ。こういうすがすがしい気分になると、又、元氣が出てきて、もう一日だけ、なんとか頑張つてやろうという氣になった。やや寐不足のようだが、小説なんぞ考えるのには、そういう頭の状態の方がかえって幻覺的でいいこともある。

どうも心細い事を云い初めたものだ、お前もこんな手紙を見ては氣が氣でないだろう。だが、もう少し辛抱をして、次ぎの手紙を待つていてくれ。何処でそれを書く事になるか、まだ僕にも分からない。……

午後、秋篠寺にて

いま、秋篠寺^{あきしのでら}という寺の、秋草のなかに寐そべって、これを書いてる。いましがた、このすこし荒れた御堂にある伎芸^{ぎげ}天女の像をしみじみと見てきたばかりのところだ。このミウズの像はなんだか僕たちのもののような氣がせられて、わけてもお慕^{あか}わしい。朱い髪をし、おおどかな御顔だけすっかり香^{かう}にお灼^やけになって、右手を胸のあたりにもちあげて軽

く印を結ばれながら、すこし伏せ目にこちらを見下ろされ、いまにも何かおっしゃられそうな様子をなすってお立ちになっていられた。……

此処はなかなかいい村だ。寺もいい。いかにもそんな村のお寺らしくしているところがいい。そうしてこんな何気ない御堂のなかに、ずっと昔から、こういう匂いの高い天女の像が身をひそませていてくださったのかとおもうと、本当にありがたい。

夕方、西の京にて

秋篠の村はずれからは、生駒山^{いこまやま}が丁度いい工合に眺められた。

もうすこし昔だと、もっと佻^わびしい村だったろう。何か平安朝の小さな物語になら、その背景には打つてつけに見えるが、それだけに、此処もこんどの仕事には使えそうもないとあきらめ、ただ伎芸天女と共にした幸福なひとときをきょうの収穫にして。僕はもう何をしようというあてもなく、秋篠川に添うて歩きながら、これを往けるところまで往って見ようかと思ったりした。

が、道がいつか川と分かれて、ひとりでに西大寺^{さいだいじ}駅に出たので、もうこれまでと思いついて、奈良行の切符を買ったが、ふいと氣がかわって郡山行の電車に乗り、西の京で下りた。西の京の駅を出て、薬師寺の方へ折れようとするとつつきに、小さな切符売場を兼ねて、古瓦^{ふるかわ}のかけらなどを店さきに並べた、佻^わびしい骨董店^{こどうてん}がある。いつも通りすがりに、ちょっと氣になって、その中をのぞいて見るのだが、まだ一ぺん

もはいつて見たことがなかった。が、きょうその店の中に日があかるくさしこんでいるのを見ると、ふいとその中にはいつてみる気になった。何か埴輪の土偶でくのようなものでもあつたら欲しいと思つたのだが、そんなものでなくとも、なんでもよかった。ただふいと何か仕事の手がかりになりそうなのがあるそんな店のがらくたの中にころがつてはいはすまいかという空頼みもあつたのだ。だが、そこで二十分ばかりねばつてみていたが、唐草文様からくさもようなどの工合のいい古瓦のかけらの他にはこれといつて目ぼしいものも見あたらなかった。なんぼなんでも、そんな古瓦など買つた日には重くつて、持てあますばかりだろうから、又こんど来ることにして、何も買わずに出た。

裏山のかげになつて、もうここいらだけ真先きに日がかげつてゐる。薬師寺の方へ向つてゆくと、そちらの森や塔の上にはまだ日が一ぱいにあたつてゐる。

荒れた池の傍をとつて、講堂の裏から薬師寺にはいり、金堂や塔のまわりをぶらぶらしながら、ときどき塔の相輪そうりんを見上げて、その水煙すいえんのなかに透かし彫ほりになつて一人の天女の飛翔ひしょうしつある姿を、どうしたら一番よく捉まえられるだろうかと角度など工夫してみていた。が、その水煙のなかにそういう天女を彫り込むような、すばらしい工夫を凝らした古人に比べると、いまどきの人間の工夫しようとしてゐる事なんぞは何んと間が抜けていることだと気がついて、もう止める事にした。

それから僕はもと来た道を引つ返し、すっかり日のかげつた築土道つじみちを北に向つて歩いていった。二三度、うしろをふり

かえつてみると、松林の上にその塔の相輪だけがいつまでも日に赫かがやいてゐた。

裏門を過ぎると、すこし田圃たんぼがあつて、そのまわりに黄いろい粗壁あらかべの農家が数軒かたまつてゐる。それが五条ごじょうという床しい字名あざなの残つてゐる小さな部落だ。天平の頃には、恐らくここいらが西の京の中心をなしてゐたものと見える。

もうそこがすぐ唐招提寺の森だ。僕はわざとその森の前を素どおりし、南大門なんだいもんも行き過ぎて、なんでもない木橋の上に出ると、はじめてそこで足を止めて、その下に水草を茂らせながら気もちよげに流れてゐる小川にじいつと見入りだした。これが秋篠川のつづきなのだ。

それから僕は、東の方、そこいら一帯の田圃たんぼごしに、奈良の市のあたりにまだ日のあたつてゐるのが、手にとるように見えるところまで歩いて往つてみた。

僕は再び木橋の方にもどり、しばらくまた自分の仕事のころなど考え出しながら、すこし気が鬱ふさいで秋篠川にそうて歩いてゐたが、急に首をふつてそんな考えを払い落し、せっかくこちらに来てゐて随分ばかばかしい事だと思ひながら、裏手から唐招提寺の森のなかへはいつていった。

金堂こんどうも、講堂も、その他の建物も、まわりの松林とともに、すっかりもう陰つてしまつてゐた。そうして急にひえびえとした夕暗のなかに、白壁だけをあかるく残して、軒も、柱も、扉も、一様に灰ばんだ色をして沈んでゆくやうとしてゐた。

僕はそれでもよかった。いま、自分たち人間のはかなさをこんなにしみて感じていられるだけでよかった。僕はひ

とりで金堂の石段にあがって、しばらくその吹き放しの円柱のかげを歩きまわっていた。それからちよつとその扉の前に立って、このまえ来たときはじめて気がついたいくつかの美しい花文を夕暗のなかに捜して見た。最初はただそこいらが数箇所、何かが剥けてでもしまった跡のような工合にしか見えないでいたが、じいっと見ているうちに、自分がこのまえに見たものをそこにいま思い出しているのに過ぎないのか、それともそれが本当に見え出してきたのか、どちらかよく分からない位の仄かさで、いくつかの花文がそこにぼおつと浮かび出していた。……

それだけでも僕はよかった。何もしないで、いま、ここにこうしているだけでも、僕は大人好い事をしているような気がした。だが、こうしている事が、すべてのものはかなく過ぎてしまう僕たち人間にとって、いつまでも好いことではあり得ないことも分かっていた。

僕はきようはもうこの位にして、此処を立ち去ろうと思いつながら、最後にちよつとだけ人間の気まぐれを許して貰うように、円柱の一つに近づいて手で撫でながら、その太い柱の真ん中のエンタシスの工合を自分の手のうちにしじみと味わおうとした。僕はそのときふとその手を休めて、じつと一つとところにそれを押しつけた。僕は異様に心が躍った。そうやってみると、夕冷えのなかに、その柱だけがまだ温かい。ほんのりと温かい。その太い柱の深部に滲み込んだ日の光の温かみがまだ消えやらずに残っているらしい。

僕はそれから顔をその柱にすれすれにして、それを嗅いでみた。日なたの匂いまでもそこには幽かに残っていた。……

僕はそうやって何んだか気の遠くなるような数分を過ごしていたが、もうすっかり日が暮れてしまったのに気がつく、ようやくと金堂から下りた。そうして僕はその儘、自分の何処かにまだ感ぜられている異様な温かみと匂いを何か貴重なもののようにかかえながら、既に真つ暗になりだしている唐招提寺の門を、いかにもさりげない様子をして立ち出でた。

二

十月十八日、奈良ホテルにて

きようは雨だ。一日中、雨の荒池をながめながら、折口博士の「古代研究」などを読んでいた。

そのなかに人妻となつて子を生んだ葛の葉という狐の話をとり上げられた一篇があつて、そこにこういう挿話が語られている。或る秋の日、その葛の葉が童子をあやしながら大好きな乱菊の花の咲きみだれているのにとれてるうちに、ふいと本性に立ち返つて、狐の顔になる。それに童子が気がつき急にこわがつて泣き出すと、その狐はそれっきり姿を消してしまう、ということになるのだが、その乱菊の花に見入っているその狐のうっとりとした顔つきが、何んとも云えず美しくおもえた。それもほんの一とおりの美しさなんぞではなくて、何かその奥ぶかくに、もっともつと思いがけないものを潜めているようにさえ思われてならなかった。

僕も、その狐のやつに化かされ出しているのではないといいが……

十月十九日、戒壇院の松林にて

きょうはまたすばらしい秋日和だ。^{あきより}午前中、クロオデルの「マリアへのお告げ」を読んだ。

数年まえの冬、雪に埋もれた信濃の山小屋で、孤独な気もちで読んだものを、もう一遍、こんどは秋の大和路の、何処かあかるい空の下で、読んでみたくて携えてきた本だが、やっとそれを読むのにいい日が来たわけだ。

雪の中で、いまよりかずと若かった僕は、この戯曲を手にしながら、そこに描かれている一つの主題——神的なものの人間性のなかへの突然の訪れといったようなもの——を、何か一枚の中世風な受胎告知図を愛するように、素朴に愛していることができた。いまも、この戯曲のそういう抒情的な美しさはすこしも減じていない。だが、こんどは読んでいるうちにいつのまにか、その女主人公ヴィオレエヌの惜しげもなく自分を与える余りの純真さ、そうしているうちに自分でも知らず識らず神にまで引き上げられてゆく驚き、その心の葛藤^{かつとう}、——そういったものに何か胸をいっばいにさせ出していた。

三時ごろ読了。そのまま、僕は何かじつとしていられなくなって、外に出た。博物館の前も素どおりして、どこへ往くということもなしに、なるべく人けのない方へ方へと歩いていった。こういうときには鹿なんぞもまっぴらだ。

^{かいだんいん}戒壇院をとり囲んだ松林の中に、誰もいないのを見すますと、漸^やっと其処に落ちついて、僕は歩きながらいま読んできたクロオデルの戯曲のことを再び心に浮かべた。そうしてこのカトリックの詩人には、ああいう無垢^{むく}な処女を神へのいけ

にえにするために、ああも彼女を孤独にし、ああも完全に人間性から超絶せしめ、それまで彼女をとりまいていた平和な田園生活から引き離すことがどうあっても必然だったのであろうかと考えて見た。そうしてこの戯曲の根本思想をなしているカトリック的なもの、ことにその結末における神への讚美のようなものが、この静かな松林の中で、僕にはだんだん何か異様^{ことさま}なものにおもえて来てならなかった。

三月堂の金堂にて

^{がつこうぼさつどう}月光菩薩像。そのまえにじつと立っていると、いましがたまで木の葉のように散らばっていたさまざまな思念ごととそっくり、その白みがかった光の中に吸いこまれてゆくような気もちがせられてくる。何んという慈^{いつく}しみの深さ。だが、この目をほそめて合掌をしている無心そうな菩薩の像には、どこか一抹^{いちまつ}の哀愁のようなものが漂っており、それがこんなにも素直にわれわれを此の像に親しませるのだという気のするのは、僕だけの感じであらうか。……

一日じゅう、たえず人間性への神性のいどみのようなものに苦しませられていただけ、いま、この柔かな感じの像のまえにこうして立っていると、そういうことがますます痛切に感ぜられてくるのだ。

十月二十日夜

きょうははじめて生駒山を越えて、河内の国高安^{たかやす}の里のあたりを歩いてみた。

山の斜面に立った、なんとなく寒さむとした村で、西の方

にはずっと河内の野が果てしなく拡がっている。

ここから二つ三つ向うの村には名だかい古墳群などもあるそうだが、そこまでは往って見なかった。そうして僕はなんの取りとめもないその村のほとりを、いまは山の向う側になつて全く見えなくなった大和の小さな村々をなつかしそうに思い浮かべながら、ほんの一時間ばかりさまよつただけで、帰ってきた。

こないだ秋篠の里からゆうがた眺めたその山の姿になにか物語めいたものを感じていたので、ふと気まぐれに、そこまですてその昔の物語の匂いをかいできただけのこと。(そう
だ、まだお前には書かなかつたけれど、僕はこのごろはね、伊勢物語なんぞの中にもこつそりと探りを入れているのだよ。……)

夕方、すこし草臥くたびれてホテルに帰ってきたら、廊下でぼつたり小説家のA君に出逢つた。ゆうべ遅く大阪からこちらに著き、きょうは法隆寺へいって壁画の模写などを見てきたが、あすはまた京都へ往くのだといっている。連れがふたりいた。ひとりはその壁画の模写にたずさわっている奈良在住の画家で、もうひとりは京都から同道の若き哲学者である。みんなと一しよに僕も、自分の仕事はあきらめて、夜おそくまで酒場で駄弁だべっていた。

十月二十一日夕

きょうはA君と若き哲学者のO君とに誘われるがままに、僕も朝から仕事を打棄うちやつて、一しよに博物館や東大寺をみてまわつた。

午後からはO君の知っている僧侶の案内で、ときおり僕が仕事のことなど考えながら歩いた、あの小さな林の奥にある戒壇院かいだんいんの中にもはじめてはいることができた。

がらんとした堂のなかは思ったより真つ暗である。案内の僧があけ放してくれた四方の扉からも僅かしか光がさしこんでこない。壇上の四隅に立ちはだかつた四天王の像は、それぞれ一すじの逆光線をうけながら、いよいよ神々しさを加えているようだ。

僕は一人きりいつまでも広目天こうもくてんの像のまえを立ち去らずに、そのまゆねをよせて何物かを凝視している貌かおを見上げていた。なにしろ、いい貌だ、温かदैいて烈はげしい。……

「そうだ、これはきつと誰か天平時代の一流人物の貌をそっくりそのまま模してあるにちがいない。そうでなくては、こんなに人格的に出来あがるはずはない。……」そうおもいながら、こんな立派な貌に似つかわしい天平びとは誰だろうかなあと想像してみたりしていた。

そうやって僕がいつまでもそれから目を放さずにいると、北方たもちんの多聞天の像を先刻から見ていたA君がこちらに近づいてきて、一しよにそれを見だしたので、

「古代の彫刻で、これくらい、こう血の温かみのあるのは少いような気がするね。」と僕は低い声で言った。

A君もA君で、何か感動したようにそれに見入っていた。が、そのうち突然ひとりごとのように言った。「この天邪鬼あまのじやくと
いうのかな、こいつもこうやって千年も踏みつけられてきたのかとおもうと、ちよつと同情するなあ。」

僕はそう言われて、はじめてその足の下に踏みつけられて

苦しうに悶^{もだ}えている天邪鬼に気がつき、A君らしいヒュウマニズムに類笑みながら、そのほうへもしばらく目を落した。……

数分後、戒壇院の重い扉が音を立てながら、僕たちの背後に鎖^{とぎ}された。再びあの真つ暗な堂のなかは四天王の像だけになり、其処には千年前の夢が急にいきいきと蘇^{よみがえ}り出して、い

そうなのに、僕は何んだか身の緊^しるような気がした。それから僕たちは僧侶の案内で、東大寺の裏へ抜け道をし、正倉院がその奥にあるという、もの寂びた森のそばを過ぎて、畑などもある、人けのない裏町のほうへ歩いていった。

と、突然、僕たちの行く手には、一匹の鹿が畑の中から犬に追い出されながらもの凄^こい速さで逃げていった。そんな小さな葛^{かつとう}藤^{とう}までが、なにか皮肉な現代史の一場面のように、僕たちの目に映った。

十月二十三日、法隆寺に向う車窓で

きのうは朝から一しう懸命になって、新規に小説の構想を立ててみたが、どうしても駄目だ。きょうは一つ、すべての局面転換のため、最後のとっておきにしていた法隆寺へ往って、こないだホテルで一しうに話した画家のSさんに壁画の模写をしているところでも見せてもらって、大いに自分を発奮させ、それから夢殿^{ゆめどの}の門のまえにある、あの虚子の「斑鳩^{いかるが}物語」に出てくる、古い、なつかしい宿屋に上がって、そこで半日ほど小説を考えてくるつもりだ。

十月二十四日、夕方

きのう、あれから法隆寺へ行って、一時間ばかり壁画を模写している画家たちの仕事を見せて貰いながら過ごした。これまでにも何度かこの壁画を見にきたが、いつも金堂のなかが暗い上に、もう何処もかも痛いたしいほど剥落^{はくらく}しているのだ、殆ど何も分からず、ただ「かべの糸のほとけのくにもあれにけるかも」などという歌がおのずから口ずさまれてくるばかりだった。——それがこんど、金堂^{こんどう}の中にはいってみると、それぞれの足場の上で仕事をしている十人ばかりの画家たちの背ごしに、四方の壁に四仏浄土を描いた壁画の隅々までが蛍光灯のあかるい光のなかに鮮やかに浮かび上がっている。それが一層そのひどい剥落のあとをまざまざと見せてはいるが、そこに浮かび出てきた色調の美しいといったらない。画面全体にほのかに漂っている透明な空色が、どの仏たちのまわりにも、なんともいえず愉^{たの}しげな雰^{ふん}囲^い気をかもし出している。そうしてその仏たちのお貌^{おもう}だの、宝冠^{てんね}だの、天衣^{てんね}だのは、まだところどころの陰などに、目のさめるほど鮮やかな紅だの、緑だの、黄だの、紫だのを残している。西域あたりの画風らしい天衣などの緑いろの凹凸のぐあいも言いしれず美しい。東の隅の小壁に描かれた菩薩^{ぼさつ}の、手にしている蓮華^{れんげ}に見入っていると、それがなんだか薔薇^{ばら}の花かなんぞのような、幻覚さえおこって来そうになるほどだ。

僕は模写の仕事の邪魔をしないように、できるだけ小さくなって四壁の絵を一つ一つ見てまわっていたが、とうとうしまいに僕もSさんの櫓^{やぐら}の上にあがりこんで、いま描いている部分をちかちかと見せて貰った。そこなどは色もすっかり剥^は

げている上、大きな亀裂が稲妻形にできている部分で、そういうところもそっくりその儘に模写しているのだ。なにしろ、こんな狭苦しい櫓の上で、絵道具のいっぱい散らばった中に、身じろぎもならず坐ったがり、一日じゅう仕事をして、一寸平方位の模写しかできないそうだ。どうかすると何んにもない傷痕ばかりを描いているうちに一と月ぐらいはいつのまにか立ってしまうこともあるという。——そんな話を僕にしなから、その間も絶えずSさんは絵筆を動かしている。僕はSさんの仕事の邪魔をするのを恐れ、お礼をいって、ひとりで櫓を下りてゆきながら、いまにも此の世から消えてゆくこうとしている古代の痕をこうやって必死になつてその儘に残そうとしている人たちの仕事に切ないほどの感動をおぼえた。：

それから金堂を出て、新しくできた宝蔵の方へゆく途中、子規の茶屋の前で、僕はおもいがけず詩人のH君にひょつくりと出逢つた。ずっと新薬師寺に泊っていたが、あす帰京するのだそうだ。そうして僕がホテルにいたということをきいて、その朝訪ねてくれたが、もう出かけたあとだったので、こちらに僕も来ているとは知らずに、ひとりで法隆寺へやつて来た由。——そこで子規の茶屋に立ちより、柿など食べながらしばらく話しあい、それから一しよに宝蔵を見にゆくことにした。

僕が一番好きな百済観音は、中央の、小ぢんまりとした明かるい一室に、ただ一体だけ安置せられている。こんどはひどく優遇されたものである。が、そんなことにも無関心そうに、この美しい像は相変らずあどけなく頬笑まれながら、静

かにお立ちになっていられる。……

しかしながら、此のうら若い少女の細っそりとしたすがたをなすっていられる菩薩像は、おもえば、ずいぶん数奇なる運命をもたれたもうたものだ。——「百済観音」というお名称も、いつ、誰がとなえだしたもののやら。が、その示すごとく古朝鮮などから将来せられたという伝説もそのまま素直に信じたいほど、すべてが遠くからきたものの異常さで、そのうつとりと下脹れした頬のあたりや、胸のまえで何をそうして持っていたのだかも忘れてしまつていような手つきの神々しいほどのうつつなさ。もう一方の手の先きで、ちよいと軽くつまんでいるきりの水瓶などはいまにも取り落しはすまいかとおもわれる。

この像はそういう異国のものであるというばかりではない。この寺にこうして漸々と落ちつくようになったのは中古の頃で、それまでは末寺の橘寺あたりにあったのが、その寺が荒廃した後、此処に移されてきたのだらうといわれている。その前はどこにあったのか、それはだれにも分からないらしい。ともかくも、流離というものを彼女たちの哀しい運命としなければならなかった、古代の気だかくも美しい女たちのように、此の像も、その女身の美しさのゆえに、国から国へ、寺から寺へとさすらわれたかと想像すると、この像のまだうら若い少女のような魅力もその底に一種の犯し難い品を帯びてくる。……そんな想像にふけりながら、僕はいつまでも一人でその像をためつすがめつして見ていた。どうかすると、ときどき揺らいでいる瓔珞のかげのせいか、その口もとの無心そうな頬笑みが、いま、そこに漂ったばかりかのように見

えたりすることもある。そういう工合なども僕にはなかなか
ありがたかった。……

それから次ぎの室で伎楽面ぎやくめんなどを見ながら待っていてくれ
たH君に追いついて、一しよに宝蔵を出て、夢殿のそばを通
りすぎ、その南門のまえにある、大黒屋という、古い宿屋に
往つて、昼食をとにした。

その宿の見はらしのいい中二階になった部屋で、田舎らし
い鳥料理など食べながら、新薬師寺での暮らしぶりなどをき
いて、僕も少々うらやましくなった。が、もうすこし人並み
のからだにしてからでなくては、そういう精進三昧しょうじんさんまいはつづけ
られそうもない。それからH君はこちらに滞在中に、ちか頃
になく詩がたくさん書けたといつて、いよいよ僕をうらやま
しがらせた。

四時ごろ、一足さきに帰るといふH君を郡山ごおりやま行きのバスの
ところまで見送り、それから僕は漸つとひとりになった。が、
もう小説を考えるような気分にもなれず、日の暮れるまで、
ぼんやりと斑鳩いかるがの里をぶらついていた。

しかし、夢殿の門のまえの、古い宿屋はなかなか哀れ深か
った。これが虚子の「斑鳩物語」に出てくる宿屋。なにしろ、
それはもう三十何年かまえの話らしいが、いまでもそのとき
とおなじ構えのようだ。もう半分家が傾いてしまっていて、
中二階の廊下など歩くのもあぶない位になっている。しかし
その廊下に立つと、見はらしはいまでも悪くない。大和の平
野が手にとるように見える。向うのこんもりした森が三輪山みわやま
あたりらしい。菜の花がいちめんに咲いて、あちこちに立っ
ている梨の木も花ざかりといった春さきなどは、さぞ綺麗だ

ろう。と、何んということなしに、そんな春さきの頃の、一
と昔まえのいかるがの里の若い娘のことを描いた物語の書き
出しのところなどが、いい気もちになって思い出されてくる。
——しかし、いまはもうこの里も、この宿屋も、こんなす
っかり荒れてしまっている。夜になったつて、箴おきを打つ音で
旅びとの心を慰めてくれるような若い娘などひとりもいまい
だが、きいてみると、ずっと一人きりでこの宿屋に泊り込ん
で、毎日、壁画の模写にかよっている画家がいるそうだ。そ
れをきいて、僕もちよつと心を動かされた。一週間ばかりこ
の宿屋で暮らして、僕も仕事をしてみたら、もうすこしぴん
とした気もちで仕事ができるかも知れない。

どのみち、きょうは夢殿や中宮寺なんぞも見損つたから、
またあすかあさつて、もう一遍出なおして来よう。そのとき
までに決心がついたら、ホテルなんぞはもう引き払つて来て
もいい。……

そんな工合で、結局、なんにも構想をまとめずに、暗くな
ってからホテルに帰つてくると、僕は、夜おそくまで机に向
つて最後の努力を試みてみたが、それも空しかった。そうし
て一時期かくなつてから、半分泣き顔をしながら、寢床には
いった。が、昼間あれだけ気もちよげに歩いてくるせいか、
よく眠れるので、愛想がつきる位だ。——

けさはすこし寝坊をして八時起床。しかし、お昼もきょう
はホテルでして、一日じゅう新しいものに取りかかっていた。
た。——こないだ折口博士の論文のなかでもって綺麗だなあ
とおもった葛くずの葉はという狐の話。あれをよんでから、もつと
いろんな狐の話をよみたくなつて、靈異記りょういぎや今昔物語などを

捜して買ってきてあったが、けき起きしなにその本を手にと
ってみているうちに、そんな狐の話ではないが、そのなかの
或る物語がふいと僕の目にとまった。

それは一人のふしあわせな女の物語。——自分を与え与え
しているうちにいつしか自分を神にしていたようなクロオデ
ル好みの聖女とは反対に、自分を与えれば与えるほいよい
よはかない境涯に堕ちてゆかなければならなかった一人の女
の、世にもさみしい身の上話。——そういう物語の女を見い
だすと、僕はなんだか急に身のしまるような気もちになった。
これならば幸先きがよい。そういう中世のなんでもない女を
描くのなら、僕も無理に背のびをしなくともいいだろう。こ
んやもう一晚、この物語をとつくりと考えてみる。

ジャケット届いた。本当にいいものを送ってくれた。けさ
などすこし寒かったので、一枚ぐらいジャケットを用意し
てくればよかったとおもっていたところだ。こんやから早速著
てやろう。

十月二十四日夜

ゆうがた、浅茅が原のあたりだの、ついじのくずれから菜
畑などの見えたりしている高畑の裏の小径だのをさまよいな
がら、きのうから念頭を去らなくなった物語の女のうえを考
えつづけていた。こうして築土のくずれた小径を、ときどき
尾花などをかき分けるようにして歩いていると、ふいと自分
のまえに女を捜している狩衣すがたの男が立ちあらわれそう
な気がしたり、そうかとおもうとまた、何処かから女のかな
しげにすすり泣く音がきこえて来るような気がして、おもわ

ずぞっとしたりした。これならば好い。僕はいつなん時でも、
このまますすり泣くその物語の中にはいつてゆけそうな気がす
る。……

この分なら、このままホテルにいて、ときどきこいらを
散歩しながら、一週間ぐらいで書いてしまえそうだ。

十月二十五日夜

けさちょっと博物館にいっただけで、あとは殆ど部屋とヴ
エランダとで暮らしながら、小説の構想をまとめた。構想だ
けはすっかり出来た。いま細部の工夫などを愉しんでやって
いる。日暮れごろ、また高畑のほうへ往つて、ついじの崩れ
のあるあたりを歩いてきた。尾花が一めんに咲きみだれ、も
う葉の黄ばみだした柿の木の間から、夕月がちらりと見えた
り、三笠山の落ちついた姿が渋い色をして見えたりするのが、
何んともいえずに好い。晩秋から初冬へかけての、大和路は
さぞいいだろうなあと、つい小説のほうから心を外らして、
そんな事を考え出しているうちに、僕は突然或る決心をした。

——僕はやはり二三日うちに、荷物はこのまま預けておいて、
ホテルを引き上げよう。しかし、いかるがの宿に籠もるので
はない。東京へ帰る。そうしておまえの傍で、心しずかにこ
の仕事に向い、それを書き上げてから、もう一度、十一月の
なかば過ぎにこちらに来ようというのだ。そうして大和路の
どこかで、秋が過ぎて、冬の来るのを見まもっていたい。都
合がいたら、おまえも一しょにつれて来よう、どうもいま
こうして奈良にいますと、一日じゅう仕事に没頭しているのが
何んだかもつたなくなつて、つい何処かへ出かけてみた

なる。何処へいっても、すぐもうそこには自分の心を豊かにするものがあるのだからなあ。しかし、昼間はそうやって歩きまわり、夜は夜で、落ちついてゆうべの仕事をにつけるなんという真似のできない僕のことだから、いっそのまま出来かけの仕事をもって東京へ帰った方がいいのではないかとまあそんな事も一とおりは考えに入れたうえの決心なのだ。僕はホテルに帰ってくると、また気のかわらないうちにとおもって、すぐ帳場にそのことを話し、しあさつての汽車の切符を買っておいで貰うことにした。

十月二十六日、斑鳩の里にて

きょうはめずらしくのんびりした気もちで、汽車に乗り、大和平をはずに横ぎって、佐保川に沿ったり、西の京のあたりの森だの、その中ほどにくっきりと見える薬師寺の塔だのをなつかしげに眺めたがら、法隆寺駅についた。僕は法隆寺へゆく松並木の途中から、村のほうへはいつて、道に迷ったように、わざと民家の裏などを抜けたりしているうちに、夢殿の南門のところへ出た。そこでちょっと立ち止まって、まんなまの例の古い宿屋をしげしげと眺め、それから夢殿のほうへ向った。

夢殿を中心として、いくつかの古代の建物がある。ここいらは厩戸皇子の御住居のあとであり、向うの金堂や塔などが立ち並んでおのずから厳肅な感じのするあたりとは打って違って、大いになごやかな雰囲気を漂わせていてしかるべき一廓。——だが、この二三年、いつ来てみても、何処か修理中であって、まだ一度もこのあたりを落ちついた気もちにな

って立ちもとったことがない。

いまだにそのまわりの伝法堂などは板がこいがされているが、このまえ来たとき無慙にも解体されていた夢殿だけは、もうすっかり修理ができあがっていた。……

そこで僕はときどきその品のいい八角形をした屋根を見あげ見あげ、その小ぢんまりとした庭を往ったり来たりしながら、

ゆめどのはしづかなるかなものもひにこもりていまもましますがごと

義疏のふでたまたまおきてゆふかげにおりたたしけむこれのふるには

そんな「鹿鳴集」の歌などを口ずさんでは、自分の心のうちに、そういった古代びとの物静かな生活を蘇らせてみたりしていた。

僕は漸く心がしづかになってから夢殿のなかへはいり、秘仏を拝し、そこを出ると、再び板がこいの傍をとおって、いかにも度ましげに、中宮寺の観音を拝しにいった。——

それから約三十分後には、僕は何か赫かしい目つきをしながら、村を北のほうに抜け出し、平群の山のふもと、法輪寺や法起寺のある森のほうへぶらぶらと歩き出していた。

ここいら、古くはいかるがの里と呼ばれていたあたりは、その四囲の風物にしても、又、その寺や古塔にしても、推古時代の遺物がおおいせいか、一種蒼古な気分をもっているようにおもわれる。或いは厩戸皇子のお住まいになられていた

のがこのあたりで、そうしてその中心に夢殿があり、そこにおける真摯な御思索がそのあたりのすべてのものにまで知らず識らずのうちに深い感化を与え出していたようなことがあるかも知れない。そうしてこのあたりの山や森などはもつとも早く未開状態から目覚めて、そこに無数に巣くっていた小さな神々を追いつき、それらの山や森を朝夕うちながめながら暮らす里人たちは次第に心がなごやかになり、生きていることよろこびをも深く感ずるようになりはじめていた。：

そうだ、僕はもうこれから二三年勉強した上でのことだが、日本に仏教が渡来してきて、その新しい宗教に次第に迫いやられながら、遠い田舎のほうへと流浪の旅をつづけ出す、古代の小さな神々の佗びというしる姿を一つの物語にして描いてみたい。それらの流瀟の神々にいたく同情し、彼等をなつかしみながらも、新しい信仰に目ざめてゆく若い貴族をひとり見つけてきて、それをその小説の主人公にするのだ。なかなか好いものになりそうではないか。

行く手の森の上に次ぎ次ぎに立ちあらわれてくる法輪寺や法起寺の小さな古塔を目にしながら、そんな小説を考え考え、そこいらの田圃の中を歩いていると、僕はなんともいえず心なごやかな、いわばパストラルな気分になごなり出していた。

十月二十七日、琵琶湖にて

けさ奈良を立って、ちょっと京都にたちより、往きあたりばったりにはいった或る古本屋で、リルケが「ぼるとがる文」

などと共に愛していた十六世紀のリヨンびとルイズ・ラベという薄倅の女詩人のかわいらしい詩集を見つけて、飛びあがるようになって喜んで、途中、そのなかで、

「ゆふべわが臥床に入りて、いましも甘き睡りに入らんとすれば、わが魂はわが身より君が方にとあくがれ出づ。しかるときは、われはわが胸に君を掻きいだきゐるがとき心ちす、ひねもす心も切に恋ひわたりゐし君を。ああ、甘き睡りよ、われを欺りてなりとも慰めよ。うつつにては君に逢ひがたきわれに、せめて恋ひしき幻をだにひと夜与へよ。」という哀婉な一章などを拾い読みしたりしつつ、午過ぎ、やっと近江の湖にきた。

ここで、こんどの物語の結末——あの不しあわせな女がこの湖のほとりでむかしの男と再会する最後の場面——を考えながら、あすは東京に帰るつもりだ。

いま、ちょっと近所の小さな村を二つ三つ歩いてきてみた。どこの人家の垣根にも、茶の花がしろじろと咲いていた。これで、昼の月でもほのかに空に浮かんでいたら満点だが。

古墳

J 兄

この秋はずっと奈良に滞在していましたが、どうも思うように仕事がかどらず、とうとうその仕事をかたづけするためにはばらく東京に舞いもどっていました。それからすぐまたこちらに来るつもりでしたが、すこし無理をして仕事をしたため、そのあとがひどく疲れて一週間ばかり寐たり何かしているうちに、つい出そびれて、やっと十二月になってこちらに來たような始末です。この七日にはどうしても帰京しなければならぬ用事がある上、こんどはどうしても倉敷の美術館にいつてエル・グレコの「受胎告知」を見てきたいので、奈良には三四日しかいらぬことになるました。まるでこの秋ホテルに預けておいた荷物をとりにだけきたような恰好です。

でも、そんな三四日だって、こちらでもって自分の好きなように過ごすことができるのだとおもうと、たいへん幸福でした。僕は一日の夜おそくホテルに著いてから、さあ、あすからどうやって過ごそうかと考え出すと、どうも往つてみたところろが沢山ありすぎて困つてしまいました。そこで僕はそれを二つの「方」に分けて見ました。一つの「方」には、まだ往つたことのない室生寺や聖林寺、それから浄瑠璃寺などがあります。もう一つの「方」は、飛鳥の村々や山の辺の道のあたり、それから瓶原のふるさとなどで、そんないまは何

んでもなくなつてゐるようなところをぼんやり歩いてみたいとも思いました。こんどはそのどちらか一つの「方」だけで我慢することにして、その選択はあすの朝の気分にかかせることにして寐床にはいりました。……

翌朝、食堂の窓から、いかにも冬らしくすっきりした青空を見ていますと、なんだかもう此処にこうしてゐるだけいい、何処にも出かけなくつたつていいと、そんな欲のない気持ちにさえなり出した位ですから、勿論、めんどくさい室生寺ゆきなどは断念しました。そうして十時ごろやつとホテルを出て、きょうはさしあたり山の辺の道ぐらいということにしてしまいました。三輪山の麓をすこし歩きまわつてから、柿本人麻呂の若いころ住んでいたといわれる穴師の村を見に纏向山のほうへも往つてみたりしました。このあたり一帯の山麓には名もないような古墳が群らがつてゐるということを聞いていたので、それでも見ようとおもつてゐただけれど、どちらに向つて歩いてみても、丘という丘が蜜柑畑で、若い娘たちが快活そうに唄い唄い、鉄の音をさせながら蜜柑を採つてゐるのでした。何か南国的といったいほど、明るい生活気分にあちみちてゐるようなのが、僕にはまったくおもしろいだけでなく思われました。——が、そういう蜜柑山の殆どすべてが、ことによつたら古代の古墳群のあとなのかとも知れません。次ぎの日——きのうは、恭仁京の址をたずねて、瓶原にいて一日じゅうぶらぶらしてゐました。この山々もおおく南を向き、その上のほうが蜜柑畑になつてゐると見え、静かな林のなかななどを、しばらく誰にも逢わずに山のほうに歩い

っていると、突然、上のほうから蜜柑をいっぱい詰めた大きな籠^{かご}を背負った娘たちがぎゃっぎゃっといきながら下りてくるのに驚かされたりしました。ながいこと山国の寒く痩^やせさらばうたような冬にばかりなじんで来たせいかな、どうしても僕には此処はもう南国に近いように思われてなりませんでした。だが、また山の林の中にひとりきりにされて、急にちかぢかと見えだした鹿^{かせ}背^せ山^{やま}などに向っていると、やはり山べの冬らしい気もちになりました。……

きょうは、朝のうちはなんだか曇^{くも}っていて、急に雪でもふり出しそうな空合いでしたが、最後の日なので、おもいきって飛鳥ゆきを決行しました。が、畝^{うね}傍^{はな}山のふもとまで来たたら、急に日がさしてきて、きのうのように気もちのいい冬日^{ふゆびより}和^ななりました。三年まえの五月、ちょうど桐の花の咲いていたころ、君といっしょにこのあたりを二日つづけて歩きまわった折のことを思い出しながら、大体そのときと同じ村々をこんなとは一人きりで、さも自分のよく知っている村かなんぞのような気やすさで、歩きまわって来ました。が、帰りみち、途中で日がとつぷりと昏^くれ、五条野^{ごじょうの}あたりで道に迷ったりして、やっと月あかりのなかを岡寺の駅にたどりつきました：

あすは朝はやく奈良を立て、一気に倉敷を目ざして往くつもりです。よほど決心をしてかからないことには、このままこちらでぶらぶらしてしまいそうです。見たいものはそれは一ぱいあるのですから。だが、こんどはどうあっても僕はエル・グレコの絵を見て来なければなりません。なぜ、そんなに見て来なければならぬような気もちになってしまった

のか、自分でもよく分かりません。僕のうちの何物かがそれを僕に強く命ずるのです。それにどういうものか、こんどそれを見損^{みそん}ったら、一生見られないでしまうような焦^{しやう}躁^{そう}のようなものさえ感ぜられるのです。——で、僕は朝おきぬけにホテルを立てるようにすっかり荷物をまとめ、それからやっと落ちついた気もちになって、君にこの手紙を書き出しているのです。こんどこちらにちょっと来ていろいろ考えたこと——というより、三年まえに君と同道してこの古い国をさまよい歩いたときから僕のうちに萌^もした幾つかの考えのうちでも、まあどうやらこうやら恰好のつきだしているものを、ともかくも一応君にだけでも報告しておきたいと思うのです。

その三年前のこと、僕はいままでの仕事にも一段落ついたようなので、これから新しい仕事をはじめするため、一種の気分転換に、ひとりで大和路をぶらぶらしながら、そのあたりのなごやかな山や森や村などを何んということなしに見てまわって来るつもりでした。それが急に君と同伴することになり、いきおい古美術に熱心な君にひきずられて、僕までも一しように懸命になって古い寺や仏像などを見だし、そして僕の旅^{りょ}囊^{のう}はおもいがけなくも豊かにされたのでした。きょう僕がいろいろな考えのまにまに歩いてきた飛鳥の村々にしたって、この前君と同道していなかったら、きょうのように好い収穫を得られなかったのではないかと思います。もし僕ひ

とりきりだったら、僕はただぼんやりと飛鳥川だの、そのあたりの山や丘や森や、そのうえに拡がった気もちのいい青空だのを眺めながら、愉^{たの}しい放浪児のように歩きまわっていただけだったでしょう。——が、君に引っぱってゆかれる儘^{まま}、僕はそんなものをついぞ見ようとも思わなかった古墳だの、廃寺のあとに残っている礎石だのを、初夏の日ざしを一ぱいに浴びながら見てまわったりしました。そのときはあんまり引っぱりまわされたので少し不平な位でした。しかし、どうもいまになって考えて見ると、そのとき君のあとにくっついて何気なく見たりしていたもののうちには、その後何かと思ひ出されて、いろいろ僕に役立ったものも少くはないようです。あの菖蒲池古墳^{あやめいけこふん}のごときは、君のおかげで僕の知った古墳ですが、あれなどはもっとも忘れがたいもののひとつでありましょう。

そうです、そのときはまず畝傍山の松林の中を歩きまわり、^{くめでら}久米寺に出、それから軽^{かる}や五条野などの古びた村を過ぎ、小さな池（それが菖蒲池か）のあった丘のうえの林の中を無理に抜けて、その南側の中腹にある古墳のほうへ出たのでしたね。——古代の遺物である、筋のいい古墳というものを見たのは僕にはそれがはじめてでした。丘の中腹に大きな石で囲った深い横穴があり、無慙^{むざん}にもこわされた入口（いまは金網がはってある……）からのぞいてみると、その奥の方に石棺らしいものが二つ並んで見えていました。その石棺もひどく荒らされていて、奥の方にはまだ石の蓋^{ふた}がどうやら原形を留めたまま残っていますが、手前にある方は蓋など見るかげもなく毀^{こわ}されていました。

この古墳のように、夫婦とともに葬ったのか、一つの石廓^{せつかく}のなかに二つの石棺を並べてあるのは比較的に珍らしいこと、すっかり荒らされている現在の状態でも分かるように、これらの石棺はかなり精妙に古代の家屋を模してつくられているが、それはずっと後期になって現われた様式であること、それからこの石棺の内部は乾漆^{かんじつ}になっていたこと、そして一めに朱で塗られてあったと見え、いまでもまだところどころに朱の色が鮮やかに残っているそうであること、——そういう細かいことまでよく調べて来たものだと言の説明を聞いて僕は感心しながらも、さりげなさそうな顔つきをしてその中をのぞいていました。その玄室^{げんしつ}の奥ぶかくから漂ってくる一種の湿め湿めとした気とともに、原始人らしい死の觀念がそのあたりからいまだに消え失せずにいるようで、僕はだんだん異様な身ぶるいさえ感じ出していました。——やっとその古墳のそばを離れて、その草ふかい丘をずんずん下りてゆくと、すぐもう麦畑の向うに、橘寺のほうに往くらしい白い道がまぶしいほど日に赫^{かがや}きながら見え出しました。僕たちはそれからしばらく黙^{もく}りあつて、その道を橘寺のほうへ歩いてゆきました。……

そうやって君と一しょにはじめて見たその菖蒲池古墳、——そのときはなんだか荒^{すさ}んだ、古墳らしい印象を受けただけのよう思っていました。が、だんだん月日が立って何かの折にそれを思い出したりしているうちに、そのいかにもさり

げなさそうに一ぺん見たきりの古墳が、どういふものか、僕の心のうちにいつも一つの場所を占めているようになって来ました。——いわば、それは僕にとっては古代人の死に対する観念をひとつの形象にして表わしてくれているようなところがあるのでありましょう。いつごろからそういう古代人の死の考えかたなどに僕が心を潜めるようになったかと云いますと、それは万葉集などをひらいて見ることに、そこにいくつとなく見出される挽歌ばんかの云うに云われない美しさに胸をしめつけられることの多いがためでした。このごろ漸よやくそういう挽歌の美しさがどういふところから来ているかが分かりかけて来たような気がします。

先ず、古代人の死に対する考えかたを知るために、あの菖蒲池古墳についてかんがえて見ます。あの古墳に見られるごとき古代の家屋をいかにも真似たような石棺様式、——それはそのなかに安置せらるべき死者が、死後もなおずっとそこで生前とほとんど同様の生活をいとなむものと考えた原始的な他界信仰のあらわれ、或いはその信仰の継続でありましよう。しかし、僕たちが見たその古墳のように、その切妻形の屋根といい、浅く彫上げてある柱といい、いかにもその家屋の真似が精妙になってきだすのと前後して、突然、そういう立派な古墳というものがこの世から姿を消してしまうことになったのです。これはなかなか面白い現象のようです。勿論、それには他からの原因もいろいろあったでしょう。だが、そういう現象を内面的に考えてみても考えられないことはない。つまり、そういう精妙な古墳をつくるほど頭脳の進んで来た古代人は、それと同時にまた、もはや前代の人々のもつてい

たような素朴な他界信仰からも完全にぬけ出してきたのです。——一方、火葬や風葬などというものが流行はやってきて、彼等のあいだには死というものに対する考えかたがぐっと変わって来ました。それがどういう段階をなして変わっていったかというところが、万葉集などを見ているとよく分かるような気がします。……

たとえば、巻二にある人麻呂の挽歌。——自分のひそかに通っていた軽かるの村の愛人が急に死んだ後、或る日いたたまれないように、その軽の村に来てひとりで懊惱おうれうする、そのおりの挽歌であります。その長歌が「……軽かるの市にわが立ち聞けば、たまだすき畝傍うねびの山に鳴く鳥の声も聞えず。たまぼこの道行く人も、ひとりだに似るが行かねば、すべをなみ、妹いもが名呼びて袖ぞ振りつる」と終わると、それがこういう二首の反歌でおさめられてあります。

秋山あきやまの黄葉もみぢを茂しげみ迷まどはせる妹いもを求めむ山路やまぢ知らずも
もみぢ葉はの散りゆくなべにたまづさの使つかひを見れば逢あひし
日思おもほゆ

丁度、晩秋であつたのでありましょう。彼がそうやって懊惱しながら、軽の村をさまよっていますと、おりから黄葉がしきりと散っておりまう。ふと見上げてみると、山という山がすっかり美しく黄葉もみぢしている。それらの山のなかに彼の愛人も葬られているのにちがいないが、それはどこいらであらうか。そんな山の奥ぶかくに、彼女がまだ生前とすこしも変らない姿で、なんだか道に迷つたような様子をしてさまよい

つづけているような気もしてならない。だが、それが山のどこいらであるのか全然わからないのだ。……

そんなことを考えつづけていると、突然、誰か落葉を踏みながら自分のほうに足早に近づいてくるものがある。見ると、文を挿んだ梓の木を手にした文使いである。ふいと愛人の文を自分に届けに来たような気がして、おもわず胸をおどらせながら立ち止まっていると、落葉の音だけをあとに残してその文使いは自分の傍を過ぎていってしまう。突然、亡き愛人と逢った日の事などが苦しいほど胸をしめつけてくる。

そういう情景がいかにもまざまざと目の前に蘇って来るようであります。それだけで好い。その軽の村がどういうところであるかも、その歌がおのずから彷彿せしめている。その藤原京のころには、京にちかい、この軽のあたりには寺もあり、森もあり、池もあり、市などもあったようであります。その死んだ愛人などもよくその市に出て、人なかを歩いたりしたこともあったらしい。そしてその路からは畝傍山がまぢかに見え、そのあたりには鳥などもむらがり飛んでいたのではありません。——今もまだその軽の村らしいものが残っております。その名を留めている現在の村は、藪の多い、見ることがもなく小さな古びた部落になり果てていますが、それだけに一種のいい味があって、そこへいま往ってみても決して裏切られるようなことはありません。

低い山がいくつも村の背後にあります。そういう低い山が急に村の近くで途切れてから、それがもう一ぺんあちこちで小丘になったり、森になったり、藪になったりしているような工合の村です。そういう村の地形を考えに入れながら、も

う一ぺんさっきの歌を味わってみると、一層そのニュアンスが分かって来るような気がします。

すこし横道にそれてしまいましたが、本題に立ちかえりましょう。僕はその人麻呂の挽歌——就中その第一の反歌のなかに見られる、死に対する観念をかんがえて見ようとしていたのです。

秋山の黄葉あはれとうらぶれて入りにし妹は待てど来ま
さず

これは巻七の雑の挽歌のなかに出てくる作者不詳のものであります。非常に人麻呂の歌と似ていて、その影響をたぶんに受けて出来たものとおもわれますが、とにかくそれで見ても、こういうような愛する者の死に対する思想が、たんへん当時の人々に気に入られたということが分かるのであります。——その当時はもう原始的な他界信仰から脱して人々は漸くわれわれと殆ど同じような生と死との観念をもちはじめていたのにちがいありません。だが、自分の愛しているものでも死んだような場合には、死後もなお彼女が在りし日の姿のまま、その葬られた山の奥などをしょんぼりとさすらっているような切ない感じで、その死者のことが思い出されがちであります。そういう考え方は嘗つての他界信仰の名残りのようなものをおおく止めておりますが、半ばそれを否定しながらも、半ばそれを好んで受け入れようとしている、——すくなくとも心のうえではすっかりそれを受け入れてしまっているのであります。そうしてまた一方では、そういう

愛人の死後の姿をできるだけ美化しようとする心のはたらきがある。……そういうさまざまな心のはたらきが、ほとんど無意識的に行われて、なんの造作もなくすうつと素直に歌になったところに、万葉集のなかのすべての挽歌のいい味わいがあるのだらうと思われます。

軽の村の愛人の死をいたんだ歌とならんで、もう一首、人麻呂がもうひとりの愛人（こちらの愛人とは同棲をし、子まであった）の死を悲しんだ歌があり、それにも死者に対する同様の考えかたが見られます。「……大鳥の羽がひの山に、わが恋ふる妹はいますと人のいへば、岩根さくみてなづみ来し、よけくもぞなき。現身とおもひし妹が、玉かぎるほのかにだにも見えぬ、思へば。」——人は死んでしばらくの間は山の奥などに生きているときとすこしも変らない姿をして暮らしているものだと、老人などのいうことを聞いて、亡くなった妻恋いしさのあまりに、もしやとおもって、岩を踏み分けながら、骨を折って山のなかを捜してみたが、それも空しかった。ひよっとしたら在りし日さながらの妻の姿をちらりとでも見られはすまいかと思っていたが、ほんの影さえも見る事ができなかった。——これはその長歌の後半をなしている部分ですが、ここにも人麻呂の死に対する同様の観念があらわれております。——すこしそれが露骨に出すぎている位で、いかにも情趣のふかい前の歌ほど僕は感動をおぼえません。でも、「大鳥の羽がひの山」などというその山の云いあらわしかたには一種の同情をもちます。翼を交叉させている一羽の大きな鳥のような姿をした山、——何処にあるのだから分らないけれども、なんだかそんな姿をした山が何処かにありそう

な気がする、そんな心象を生じさせるだけでもこの山の名ひとつがどんなに歌全体に微妙に利いているか分かりません。いろいろな学者が「大鳥の」を枕詞として切り離し、「羽買山」だけの名をもった山をいろいろな文献の上から春日山の附近に求めながら、いまだにはつきり分らないでいるようです。勿論、学としてはそういう努力が大切でありましようが、これを歌として味わう上からは、そういう羽買山ではなしに、何処かにありそうな、大きな鳥の翼のような形をした山をただぼんやりと浮かべて見ているだけの方がいいような気がするのです。……

僕は数年まえ信濃の山のなかでさまざま人の死を悲しみながら、リルケの「Requiem」をはじめて手にして、ああ詩というものはこういうものだったのかとしみじみと覺つたことがありました。——そのときからまた二三年立ち、或る日万葉集に読みふけているうちに一聯の挽歌に出逢い、ああ此処にもこういうものがあつたのかとおもいながら、なんだかじつとしていられないような気もちがし出しました。それから僕は徐かに古代の文化に心をひそめるようになりました。それまでは信濃の国だけありさえすればいいような氣のしていた僕は、いつしかまだすこしも知らない大和の国に切ないほど心を誘われるようになって来ました。……

そういうようにして漸つとはじめて大和路に來た三年前のこと、君と一しょに見た、菖蒲池古墳のことから、つい考え

のまにまに思わぬことを長ながと書いてしまいました、別に最初からどういうことを書こうかと考えて書き出したわけのものでもないのです、これはこれとしてお読み下さい。

——でも、最初まあそんなものでも書こうとしかけていた僕のきょうの行程を続けてみますと、そうやって軽のあたりをさまよった後、剣の池のほうに出て、それから藁塚のあちこちに堆く積まれている蒨田のなかを、香具山や耳成山をたえず目にしながら歩いているうちに、いつか飛鳥川のまえに出てしまいました。ここいらへんはまだいかにも田舎じみた小川です。が、すこしそれに沿って歩いていきますと、すぐもう川の向うに雷の村が見えてきました。土橋があつて、ちよつといい川原になっています。僕はそこまで下りて、小さな石に腰かけながら浅いながれに目をそそいでいました。なんだか鶺鴒でもびよんびよん跳ねていたら似合うだろうとおもうような、なんでもない景色です。それから僕は飛鳥の村のほうへ行く道をとらずに、甘櫓の丘の縁を縫いながら、川ぞいに歩いてゆきました。ここいらからはしばらく飛鳥川もたいへん好い。このまえ五月に君と一しょに歩いたときからよほど僕の気に入ったものと見えます。あのときにはあそこの丘の端に桐の花が咲いていた、このへんの道ばたには一もと野茨の花も咲いていたと、そんな小さな思い出までも浮かんでくる位なのです。……

こんなことをまた書き出してたらきりがありません。もうおもしろい切ってここいらで筆をおきます。——その日の夕がた、最後のバスに乗りおくれた僕はしようがなく橘寺をうしろにして一人でてくてく歩き出しました。途中で夕焼けにな

り、南のほうに並んでいる真弓の丘などが非常に綺麗に見えました。それから僕はせっかくその前まで来ているのだからと思って、菖蒲池古墳のある丘を捜してそこまで上がったいて見ました。が、その古墳の前まで辿りついたときにはもう日がとっぷりと昏れて、石廓のなかにはほとんど何も見えない位でした。それでも僕はバスに乗りおくれたばかりにもう一度それが見られて反って好いことをしたと思いながら、もと来た道を引つかえして再び駅のほうへ薄暮のなかを歩いてゆきました。それからまた五条野のあたりで道に迷って、やっと駅に着いたときは月の光を背に浴びていたことは前にも書きました。

もう大ぶ夜もふけたようです。あすからの旅のことを思いながら、ちよつと部屋のをあけてみたら、凄いな月夜の光のなかに、荒池がほとんど水を溜らしてところどころ池の底のようなものさえ無気味に見せています。僕はなんということもなしに複製で見たエル・グレコの絵を浮かべました。——こんやはどうも寝たくはないような晩だけれども、あすの朝は早いのだし、それに四時間ばかり汽車にも乗らなければならぬのだから、なんとかうまくあやして自分を寝つかせましょう。

一九四一年十二月四日、奈良ホテルにて

「冬になって、雪がふったら、すぐ知らせて下さい。そのときはきつと、一人ででもやって来ますから。……」

その山の村にとうとう居残って冬を越すことになったK君夫妻に僕はその秋のなかばその村を立ち去るとき、そう云い残していった。

「……けさほどから急に雪がふりだしていますの。この分では大ぶ積りそうですので、主人が早くお知らせした方がいいと申しますから、これからこの手紙をもって雪のなかを郵便局まで一走りいたします」

——万里子^{まりこ}さんからそう云ってよこしたのは、もう十二月も末近かった。

僕はまえから雪の信濃路を見たがっていた学生のM君を誘ったり、一しよに往く筈だった妻の都合が悪かったりして、すこし出かけるのに手間どり、妻だけ二三日あとから来させることにして、漸々とその小さな冬の旅に出たのは、それから四五日たってからのことだった。……

ゆうがた着いたその山の村には、数日まえの雪はもう殆ど消え、林の中などにところどころわずかに雪らしいものが残っているきりだった。そんな一つの林の奥に、K君たちが冬ごもりをしている山小屋がある。

「まあ、よくいらっしやいました」その小屋の中から飛びだ

してきて僕たちを出むかえた万里子さんは、一とおり挨拶がすむと、さも困ったように大きい目をしてまじまじと僕の方を見ながら言った。「——でも、もうすっかり雪がなくなってしまうていて。なんだか……」

「いやあ、雪なんぞはどうでもいいですよ。」

僕はあわてて手をふりながら、それを遮った。

「こないだの雪は午前中ふったきりでしたの。大ぶ積ったことは積りましたけれど、午後から日があたって見る見るとけいていってしまうので、あんな手紙なんか出してしまつて、気がありませんでしたわ。——でも、まだあそこいらには少しばかり残っていますの。」

もう薄暗くなり出している林の奥のほうにまだいくらか残雪が何かの文様^{もよう}のようにみえるのを、万里子さんはすこし気まり悪そうにして示した。

僕はもうそんなものはどうでもよかったが、すっかり葉が落ちて林の中がどこまでも透いてみえたりするのを珍らしそうに見ているM君におつきあいして、その儘^{まま}しばらく三人でそこに立って見ていた。そのうち小屋のかけからボブが飛び出してきた。

「ボブ、駄目よ。……」万里子さんはその人なつこい犬が泥足でもって僕のほうに飛びかかろうとするのを、すばやく捕まえた。

「よう。」K君が小屋の中から首だけ出して僕たちに声をかけた。「何をしているんだい。寒いだろう。」

「こないだの雪をお見せしていますの。」万里子さんはボブがもがくのを漸^やとおさえつけながら言った。

「雪なんぞはもうありあしないだろう。」寒がりのK君はうちの中でも頸巻くびまきをしたままで、小屋から出て来ようともせず僕たちを促した。「早くはいりたまえ。」

「さつきこの林のいりぐちで、クルツといったかな、あの、変な女を見かけたが、なんだか夏とは見ちがえるような、凄い毛皮の外套を着て、真紅なベレかなんぞかぶって、氣どつた風に歩いていたが、こんな冬の村に一人きりで何をしているんだろう？」僕は煖炉だんろで体が温まると、突然その不思議な女のことを思いながら言った。

「では、きょうまた見にきたのでしょうか。これで三度目ですわ。」万里子さんは急に目を大きくして、頸巻をしたまま煖炉の火を掻きまわしていたK君のほうを見た。

「なんだかよく来るね。」K君はやっと手を休めながらその話に加わった。「このすこし向うに、十一月ごろまでいた独逸人ドイツじんの一家がいてね、それがクリスマス頃になったらまた来るからと云って、一時引き上げていったのさ。——その人達がまだ来ていないかどうかと、そうやってもう二週間ぐらいも前から、毎日のようにその女が様子を見にくるのだよ。二三度、僕たちのところにも立ち寄って、何か心配そうに様子をきくので、こっちでもその度に相手になってやっていたが、問い合わせの手紙でも出したらどうかと云うと、ただ首をふっているきりなのだ。もうその家では来ないことが分かっているのだ。それなのにこの頃は一日のうちに二度も三度もやって来るんだ。いつもあの毛皮の外套をきて、紅いベレをかぶって。——そうしてその度に、僕たちの家の中をじいっと見て

ゆくんだ。それをまた万里子が薄気味わるがってね。……」

「結局、一人でさびしくってしようがないんだな。こっちに

いる他の外人とは全然つきあわないのかい。」
「どうもその女だけ除のけものにされているらしい。村の人にきくとあの女はしようがありませんと云って、てんで相手にならないんだ。」

「そんなのかい。——僕はどういう素性の女がよく知らないが、夏なんぞその女が奇妙ななりをして、買物袋をぶらさげながらんだかしよぼしよぼして歩いているのを見かけては、何者だろうとおもっていたんだがね。あれで、この夏聞いたことだが、恋人がいるんだそうだ。毎夏やってくるハンガリーの音楽家でね、その男と町などで逢うと、人中だろうと何だろうと構わずに立ち止まって、黙ってその音楽家の顔を穴のあくほどじっと見つめているのだそうだよ。それがもうかれこれ十年来の意中の人ののだそうだ。」

「あの女にもそんな話がね。」K君はうなずいていた。

「どうもこんなところに来ている外人には突拍子とつぱしもない奴がいるものだな。——夏あんなに見すばらしいなりをしていた女が、冬になって誰れもいなくなると、急にすばらしい毛皮の外套なんぞを着込んで林の中をあるいていようなんて、想像もできないことだよ。だが、ああして一人つきりでもって、よく暮らしていられるものだなあ」

「本当によく暮らしているね。……」K君も考え深そうに答えた。

「だが、人のことよりか、君も寒がりのくせに、こんなところでよく我慢しているね。——どうして暮らしているだろう

と、ときどき噂をしていたよ。」

「暮らそうとおもえば、どんなことをしても暮らせることが分かったよ。それに寒さだって、こういうものだと思ってしまえば、いくらでも我慢していられるね」

「でも、万里子さん。」と僕は言葉を挿^{はさ}んだ。「あなたの方^{しごと}の為事は大へんでしょ？」

「そんなでもありませんわ、いまのところ何んにも困りませんの。」万里子さんはそんな事はいかにも何んでもなさそうな答えかたをした。

「そりあ困らないわけさ、一週間も同じものばかり食べさせられていても、僕はなんにも言わないんだもの。」K君はそうは言っても、すこしも不平そうではなかった。むしろ、そういう山のなかの簡素な暮らしを好んでいるようにさえ見えた。夕食は、しかし山のなかでは思いがけない御馳走だった。ひさしぶりに四人で鳥鍋をかこみながら身も心も温かになって、世はさまざまな話をするのは愉^{たの}しかった。

僕はこの秋から冬にかけてひとり旅して歩いた大和路のことを話した。それからその旅のおわりに、エル・グレコの絵を見てきたことなども話した。——その倉敷という小さな町まで五時間もかかって往って、やっとその美術館にたどりつき、画廊にはいるなり、すぐエル・グレコの絵に近づいて見ると、それは思ったより小さなものだったが、いかにも凄^{しみ}い絵で、一ぺんではねつけられ、しかたなく他のゴッホやロオトレックなどを一とおり丁寧に見て歩いてから、一番最後に再びそれに近づいたら、こんどはやっと少し平靜な気分ですの絵に向えたことなど話しながら、エル・グレコなんぞ

の絵の自分たちにとって、なまやさしいものでないことをしみじみと告白した。

「それもごく小さな「受胎告知図」なんだがね。ここでは、この抒情的な画題に対していただいている僕たちの観念がもの見事に粉碎せられてしまっているのだ。天使は天使で、闇のなかから突然ぎらぎらと光を発する異常なものとして描かれているし、その天使のほうを驚いて見あげている処女の顔も何かただならぬように見える。すべてがいかにも悲劇的な感じなのだ。……こんどはこの一枚だけでもよく見てゆこうとおもって、ずいぶん一所懸命になって見てきたつもりだが、どうしてもまだその絵が分かったようで分らない。そう、分らないというより、なんだかこんな絵がこんなところに来ているのが不思議な気がしてくるのだ。なんだかそれがあるべき場所にいないような……それほど何か異様なのだ……」

「そのグレコの絵は僕も見たいね。」K君は何かじつと煖^{だんろ}炉の上の空間を見入っているらしかった。

「こうやって火を焚^たいていると夜でもちつとも淋しくないでしょう。」僕はふいと万里子さんのほうを向いて言葉をかけた。いつのまに台所からはいつて来たのか、万里子さんの足もとにはボブが温かそうにうずくまりながら、僕たちの団^{だん}欒^{らん}のなかに加わっていた。

「——僕ははじめてここで冬を越すことになったとき、夕方になるといつも淋しくって淋しくってどうしようかとおもうのだけれど、すっかり夜になって火をどんどん焚きはじめる

と、もうちつとも淋しくなくなったものでしたよ。」

「本当に。」万里子さんは大きい目でしげしげと僕のほうを見

かえしながら、深くうなずいた。

それからまた煖炉を前にして、ひとしきりさまざまな話が
はずんだ。……

その夜十時過ぎ、僕たちは宿に引き上げることにした。K
君たちもそこまでちよつと送ろうといつて頸巻くびまきをしたり、外套がいとう
をきたりしだしていた。もういいからとことわっても、一し
よに小屋を出た。ボブもあとからくつついてきた。夜の空気
は稀薄で、痛いように冷え切っていた。僕たちはあすは何処
かもつと山の方——菅平すがだいらか、野辺山のべやまあたりまで出かけ、妻が
こちらに来る頃にまた戻ってくることを約束して林のはずれ
で別れた。

僕たちはそれから沈黙がちに、枯木の下を抜け抜け、僕た
ちの靴に踏まれて凍った土の割れる音を耳にしながら、歩い
ていった。するともう一つ、ときどき何処から、それとは
ちがった、硬い、金属的な幽かすかな音が聞えて来た。

「あれは何んの音でしょう？」M君がいぶかしそうに訊きいた。

「ああ、あれかい。あれは、君、枯枝と枯枝とが風でぶつか
る音だよ。——ほら、ああやってちよつとぶつかるだけでも、
ずいぶん鋭い音を立てるだろう。空気がぱりぱりになつてい
るのだね。……」

そう言いながら、一しよに頭上の梢をみあげていると、絶
えずかすかに揺れている枯枝の網を透いて、一めんの星空だ
った。そうしてその星のひとつひとつが東京なんぞの空で見
えるよりかずつと大きく見えた。

突然、右手の空家の庭の一隅で、がさがさと溜たまった落葉が
ひっかきまわされるような音がきこえた。何か白いものがそ

こいらをひとりで駆けずりまわっていた。

「ボブ！」僕はそのほうへ声をかけて見た。

すると、まるでその木魂こたまのように、向うの林の奥から「ボ
ブ！」と呼ぶ声がかすかにした。

「いまのは万里子さんらしいね。静かだなあ。なんだか、こ
う、ひさしぶりで昔の冬に出逢ったような気もちがしてなら
ないよ。……」

「またこちらで冬をお越しになりますか？」M君はさもそ
れが何んでもないことのように言った。

「そういうこともときどきは考えている。……」僕はただそ
う言っただけだった。

僕たちはまた凍った土を踏み割りながら、徐しずかに歩き出し
た。

翌日。僕たちは朝はやく小諸こもろまで往き、そこから八つが岳
の裾野を斜に横切るガソリン・カアに乗り込んだ。もう冬休
みになっていても、この山麓さんろくちほう地方はあまりスポールティフでは
ないので、乗客は僕たちのほかはみんな土地の人たちらしか
った。

南佐久みなみさくの村々の間をはじめの一時間はかりは何事もなく千
曲川に沿ってゆくだけだが、そのうち川辺の風景が少しずつ
変ってきて、白楊はくやなぎや樺かほの木など多くなり、石を置いた板屋根
の民家などが目立ちだした。そうしてそれらの枯木だの、家
だのの向うに、すっかり晴れ切った冬の空のなかに、真白な八

つが岳の姿がくつきりと見えるようになって来た。

そうやってまだ人家のおおい平原を横切りながら、ぐんぐんと雪のある山に近づいてゆく一種の云い知れない快感を満喫しながら、僕は時々、物陰などにまだ残っている雪の工合などへも目を配っていた。

「この分では、野辺山までいっても雪は大したことはなさそうだぜ。」

僕はそんなことを口ごもったりした。

「そうですかしら。」M君はもう見当がつかないような様子をして、ただ窓の向うに白く赫^{かがや}いている八つが岳のほうを見つづけていた。

そのうち、だんだん谷間のようなところにはいり出す。しばらくはもう山々ともお別れだ。そうして急に谷川らしくなりだした千曲川の流れのまん中に、いくつとなく大きな石がころがっているのばかり目に立ってくる。そんな谷の奥の、海^{うみ}の口^{くち}という最後の村を過ぎてからも、ガソリン・カアはなおも千曲川にどこまでも沿ってゆくように走りつづけていたが、急に大きなカアを描いて曲がりながら、檜^{ひのき}林^{ばやし}かなんぞのなかを抜けると、突然ばあっと明かるい、広々とした高原に出た。そうしてまだ雪もかなり沢山残っているその草原の向うの、一帯の森のうえに、真白な八つが岳——そのうちでも立派な赤岳と横岳とが並んで聳^{そび}え立っていた。

「高原というのは、こうやってそこへ出た時の最初の瞬間がなんとも云えず印象的でない。」僕はそういう目付をしてM君の方を見た。

やがて、野辺山駅に着いた。白い、小さな、瀟洒とした建

物で——いや、もうそんなことはどうでもいいことにしよう。

——それよりか、僕はその小さな駅に下りかけて、横書きの「野辺山」という三文字が目飛びこんできた途端に、なにかおもわずはっとした。いままではさほどにも思っていないかった「野辺山」という土地の名がいかにも美しい。まあ何んという素樸^{そぼく}な呼びかたで、いい味があるのだろう。そうして此処まで来て、その三文字をなにげなく口にすると、はじめてそのいい味の分かるような、それほどこの土地の一部になりにきってしまったている純粋な名なんだとおもった。……

その高原の駅に下りたのは僕たちのほかには、二人づれの猟師が一組あるきり。——その猟師たちは駅員と一しょになって檻^{おり}に入れられてきた猟犬をとり出しにかかっていた。

そこで僕たちは二人きりで駅のそとに出たが、其処はいちめんの泥濘^{どろ}だった。駅の附近には、一棟の舎宅らしいもののほか、二軒ばかり休み茶屋みたいなものがあつたが、どちらも戸を閉ざしていた、——そんなところで一休みして、簡単に腹でもこしらえながら、それからどこをどう歩くか考えてみるつもりだった。そこへいつてみれば、大体どうすればいいかがひとりりで分かつてくるだろう位に、僕はいつもの流儀で高を括^{くく}っていた。

だが、すぐ目のさきに赤岳だの横岳だのがげざやかに見えていながら、この泥濘の道ではどうしようもない。せつかくの野辺山が原もいい気もちになつて歩きまわるわけにゆきそうもない。それに、もう午^{ひる}近い。なんとか腹をこしらえないことには。……

「あそこに何か為^{しごと}事^{こと}をしている人たちが見えるな。あの人た

ちに訊いたら、すこしはこのへんの様子が分かるかもしれない。」

僕はM君にそう言い、ひどい泥濘の中には入り込まないように、道のへりのほうを歩きながら、旧街道らしいものの傍らで、二人の法被^{はっぴ}すがたの男がせつせと為事をしている方へ近づいていった。

が、だんだんそっちへ近づいていって見ると、その男たちが何か荒ら荒らしい手つきで皮を剥^むいているのは兎であるのが分かってきた。そうしてまだ生ま生ましいような皮がいくつももう板に拡げて張りつけられてあるのが見え、皮を剥^はがされた肉の塊りが道ばたまでころがり出していた。

「こいつはかなわないや。一番の苦が手だ。もう一ぺん駅までひつかえして、訊^きいてみよう。」

僕はさっさとそっちへ背を向けて、もう泥濘の中だろうとなんだらうと構わずに、その街道を突っ切りだした。そのときひよいと目を上げると、ちょうど鼻のさきに小さな道標が立っている。それで見ると右が板橋、左が三軒屋。両方とも約二^キ粒位。——そうそう、板橋という部落はなんだか聞いたことがある。たしか、そこにはわびしい旅籠屋^{はたごや}なんぞもあったはずだ。二粒ぐらいなら、思い切って往ってみようかと、M君と相談していると、——その板橋のほうへ通じている、片方は林で、もう一方は草原になった、真直な街道を、何処からどう抜け出したのか、さっきちらりと駅で見かけた猟師が二人、大きな猟犬を先立てながら、さっさと歩いてゆくのが見える。

「往こう。」と僕は言った。

「ええ。」M君もそれにすぐ応じた。

僕たちはその猟師たちのあとを追うようにしてその街道を歩き出した。どこかもひどい泥濘だが、道のへりなどにはまだすこし雪が残っている。そんな雪のうえを掴んで歩き歩き、ときどき片側の枯木林を透かしながら赤岳だの横岳だのをちかちかと目に入れたり、もう一方の、まだかなり雪が残っているような、果てしなく広い草原のはるかかなたを、甲武信^{こぶし}の国境の薄白い山々が劃^くっているのを眺めたりしていると、なかなか好いことは好い。日光もほどよく温かで、こうして歩いているとすこし汗ばんでくる位。——だが、ものの十分とたたないうちに、僕たちの前方を歩いていた猟師たちは、急に林の中へでもはいってしまったのか、もう影も形も見えない。そのかわりに、いつのまにか、僕たちの背後には重そうな鞆^{かばん}を背負った郵便配達夫がひとり姿をあらわし、黙々として泥濘のなかを歩きつづけながら、傍目もふらずに僕たちを追い越そうとしているのだった。——僕たちも何かそれにつりこまれたように、ふたりとも急に黙り合って、ぼんやりと立ち止まったまま、その郵便配達夫の通り過ぎるのを見送っていた。

僕たちはとうとう二人きりになってしまうと、別にいそぐ旅でもないのに、雪のまだかなりありそうな草原のほうへちよいとはいって行って見た。雪は、しかし、其処にもそうたんと残ってはいない。ただ遠くから見た目に何んとなくそう見えるだけのものらしい。が、そんな少しばかり雪の残った草原のまんなかに立って見ると、あちこちに一本ずつ離れ離れに立っている樺^{カハ}の木なんぞが、その変に枝をねじらせてい

る工合までも、何かなつかしく思われてくる。

「こういう高原の木は、どこか孤独の相のようなものを帯びているね。」僕はふとM君にそう言ってみたが、それだけではまだなんだか言い足りないような気がした。

それから僕たちはその儘、その草原の雪のうえを歩いてみていたが、なかなか道がはかどらない。そこで、またさっきの街道のほうへ出ることにした。

みると、こんどはその街道をやはり板橋のほうへ向かって、一匹の牝山羊をつれた女が、こう、すこし首をうなだれるようにして歩いてゆく。まだ若い女らしい。

冬の真昼、ときどきまぶしく光っている雪原、風のために枝のねじれた樹木、それらのすべてを取り囲んでいる雪の山々、——そういう自然の中からひとりでに生れてきたようなその羊飼いの女。……

「まるでセガンティニの女みたいだね。」僕はおもわず小さく叫んだ。「あの首のうなだれ方までそっくりだな。」

「セガンティニは僕はあの倉敷の美術館にあるのしか知らないな。」

M君は僕の言葉をそのまま受けいれるにはすこし自信がなさそうだった。

「そりあ知らないといえば、僕だってなんにも知らないようなものだがね、ただまあひょいとそんな聯想(れんそう)がうかんだんだ。」僕の方でもそんな云いわけをした。「そういえば、あそこにもアルプスの絵かなんかあったね。あれはどんな絵だったかな?」

「たしか真昼の牧場の絵で、アルプスが遠く見え、前のほう

に羊飼いの女の立っているような構図だったとおもいますが。……」

「ああ、それで思い出した。なんだかこう妙にねじくれた白樺の木にその女がもたれているんだろう。……」僕はその美術館ではエル・グレコの絵しか見て来なかったような気がしていたが、セガンティニのような特異な絵はやはり注意して見ていたものと見える。さっき草原に立った木をなつかしそうに見ながら、何かいまにも思い出せそうでまだ思い出せずにいるものが、その殆ど忘れかけていたセガンティニの絵に描かれた白樺の木とも何か関係のありそうなことをふいと感じた。だが、それはまだ僕のうちでもはつきりとしていない。……

僕たちはその牝山羊をつれた若い女に追いつこうとして、いそいで泥濘の街道に出て、再び道ばたの雪を拾いながら歩きはじめた。が、そんなことをして漸(よ)うや々と歩いている僕たちは、泥濘のなかをも平気で歩いてゆくその牝山羊をつれた女にもずんずん引き離されてしまった。そうしていつのまにか、また僕たち二人きりにされてしまった。

そんな調子でいくら歩いていても、野辺山が原は尽きそうもない。もうかれこれ一時間ぐらいいは歩いているだろう。腹もへってきているし、もうおしゃべりをする元気もなく、二人とも泥だらけになった靴をただ重そうに運んでいるきりになった。——そうして僕はもう口には出さずに、昔小さな本で読んだことのあるセガンティニの美しい生涯などを考えつけていた。セガンティニには、アルプスの高原の自然のなかに——いわば人間の住める自然のぎりぎりの限界のよう

なところに人間を置いて描いているような絵が多いが、その絵がどれもこれも妙に人なつこい。人間の世界から離れれば離れるほど、そしてそこに描かれてあるアルプスの風景がいよいよきびしければきびしいほどセガンティニの絵のもっている人なつこさはいよいよ切実になってくる。——そこにセガンティニの絵の写真を見ただけでも、僕たちが何か心を動かされるものがありはすまいか。……そうだ、僕がさつき草原に立った木をしみじみと見ているうちに、ふいと何か思い出せそうで思い出せずにいたもの、そのために知らず知らず心を一ぱいにさせていたもの、それはそんな木の或る恰好ばかりではなしに、こういう高原のなかに生を得ているすべての小さな生きもののもっている深い味なのだ。それらのものは、ちよつと見ると、何か近づきたいような孤独の相を帯びてみえるけれど、それらのものほど人なつこいものはないのだ。それほど切実に、存在の本質にあくがれているものはないのだ。……

そんなことを考えつづけながら、僕はもう自分の泥だらけになった靴の重たさもさほど苦にしくなっていた。

「あそこの藪やぶのなかに馬が二三匹草を食べていますね。もう村が近づいてきたのではないでしょうか。」

M君は自分の大きな身体をすこし持ち扱かい出しているように見える。

「畠もあるじゃないか。」僕はおもわず声をはずませた。「もう村に着いたようなものだ。」

いつか僕たちの歩いている街道は草原から離れて、両側が雑木林だの畠だのに変わってきた。そうしてすこし坂道になり

出した。そういう地形の変化は、もうさすがの曠野も果てようとしていることを思わせた。それに元気づき、だんだん急になるその坂道をあがってゆくと、その突きあたりに一軒の藁屋根わらやねの家が見え出し、そうしてその家の前の、ちょうど山かげになった道のほとり、一人の痩やせた老人がそこだけまだ一面に残っている雪をシャベルなんかで掻きよせていた。そこまで坂をあがり切って、その手にしたシャベルに凭よりかかって一息ついていいる老人に軽く会釈しながら、ふとそのそばを通り過ぎようとした途端、すぐ目のまえに、川を挟んだ小さな部落が見え、そうしてその中ほどには、古びた木橋が一つ、いかにも人なつこそうに、そうして「板橋」という名前をもった村の目じるしのように懸かかっていた。そうしていつか私達の眼界から遠ざかっていった八つが岳が、又、ちよ

うどその橋の真上に、白じろと赫かがいていた。

辛夷の花

「春の奈良へいって、馬酔木あしびの花ざかりを見ようとおもって、途中、木曾路をまわってきたら、おもいがけず吹雪に遭いました。……」

僕は木曾の宿屋で貰った絵はがきにそんなことを書きながら、汽車の窓から猛烈に雪のふっている木曾の谷々へたえず目をやっていた。

春のなかばだというのに、これはまたひどい荒れようだ。その寒いったらない。おまけに、車内には僕たちの外には、一しよに木曾からのりこんだ、どこか湯治にでも出かけるところらしい、商人風の夫婦づれと、もうひとり厚ぼったいふゆがいとう冬外套ふゆがいとうをきた男の客がいるつきり。——でも、上松あげまつを過ぎる頃から、急に雪のいきおいが衰えだし、どうかするとぱあつと薄日のようなものが車内にもさしこんでくるようになった。どうせ、こんなばかばかしい寒さは此処いらだけと我慢していたが、みんな、その日ざしを慕うように、向うがわの座席に変わった。妻もとうとう読みさしの本だけもってそちら側に移っていった。僕だけ、まだときどき思い出したように雪が紛々と散っている木曾の谷や川へたえず目をやりながら、こちらの窓ぎわに強情にがんばっていた。……

どうも、こんどの旅は最初から天候の具合が奇妙だ。悪いといってしまえばそれまでだが、いいとおもえば本当に具合

よくいつている。第一、きのう東京を立ってきたときからして、かなり強い吹きぶりだった。だが、朝のうちにこれほど強く降ってしまえば、ゆうがた木曾に着くまでにはとおもっている、午すひるこしまえから急に小ぶりになって、まだ雪のある甲斐かいの山々がそんな雨の中から見えだしたときは、何んともいえずすがすがしかった。そうして信濃境しんのぎかいにさしかかる頃には、おあつらえむきに雨もすっかり上がり、富士見あたりの一帯の枯原も、雨後のせいか、何かいきいきと蘇よみがえったような色さえ帯びて車窓を過ぎた。そのうちにこんどは、彼方に、木曾のまっしろな山々がくつきりと見え出してきた。……

その晩、その木曾福島福島の宿に泊って、明けがた目をさまして見ると、おもいがけない吹雪だった。

「とんだものがふり出しました……」宿の女中が火を運んできながら、気の毒そうにいうのだった。「このごろ、どうも癖くせになってしまつて困ります。」

だが、雪はいつこう苦にならない。で、けさもけさで、そんな雪の中を衝ついて、僕たちは宿を立ててきたのである。……

いま、僕たちの乗った汽車の走っている、この木曾の谷の向うには、すっかり春めいた、明かるい空がひろがっているか、それとも、うっとうしいような雨空か、僕はときどきそれが気になりでもするように、窓に顔をくつつけるようにしながら、谷の上方を見あげてみたが、山々にさえぎられた狭い空じゅう、どこからともなく飛んできてはさかんに舞い狂っている無数の雪のほかにはなんにも見えない。そんな雪の

狂舞のなかを、さつきからときおり出しぬけにぱあつと薄日がさして来だしているのである。それだけでは、いかにもたよりなげな日ざしの具合だが、ことによるとこの雪国のそとに出たら、うららかな春の空がそこに待ちかまえていそうなあんばいにも見える。……

僕のすぐ隣りの席に居るのは、このへんのものらしい中年の夫婦づれで、問屋の主人かなんぞらしい男が何か小声でいうと、首に白いものを巻いた病身らしい女もおなじ位の小声で相槌を打っている。べつに僕たちに気がねをしてそんな話し方をしているような様子でもない。それはちつともこちらの気にならない。ただ、どうも気になるのは、一番向うの席にいろんな恰好かっこうをしながら寝そべっていた冬外套の男が、ときどきおもしろい出したように起き上っては、床のうえでひとしきり足を踏み鳴らす癖のあることだった。それがはじまると、その隣りの席で向うむきになって自分の外套で脚をつつみながら本をよんでいた妻が僕のほうをふり向いては、ちよつと顔をしかめて見せた。

そんなふうで、三つ四つ小さな駅を過ぎる間、僕はあいかわらず一人だけ、木曾川に沿った窓ぎわを離れずにいたが、そのうちだんだんそんな雪もあるかないか位にしかちらつかなくなり出してきたのを、なんだか残り惜しそうに見やっていた。もう木曾路ともお別れだ。気まぐれな雪よ、旅びとの去ったあとでも、もうすこし木曾の山々にふっておれ。もうすこしの間でいい、旅びとがおまえの雪のふっている姿をどこか平原の一角から振りかえってしみじみと見入ることができ

そんな考えに自分がうつけたようになっていたときだった、ひよいとしたはずみで、僕は隣りの夫婦づれの低い話声を耳に挿さんだ。

「いま、向うの山に白い花がさいていたぞ。なんの花けえ？」
「あれは辛夷こぶしの花だぞ。」

僕はそれを聞くと、いそいで振りかえって、身体をのり出すようにしながら、そちらがわの山の端にその辛夷の白い花らしいものを見つけようとした。いまその夫婦たちの見た、それとおなじものでなくとも、そこいらの山には他にも辛夷の花さいた木が見られはすまいかとおもったのである。だが、それまで一人でぼんやりと自分の窓にもたれていた僕が急にそんな風にきよときよとそこいらを見まわし出したので、隣りの夫婦のほうでも何事かといったような顔つきで僕のほうを見はじめた。僕はどうもてれくさくなって、それをしおに、ちょうど僕とは筋向いになった座席であいかわらず熱心に本を読みつづけている妻のほうへ立ってゆきながら、「せっかく旅に出てきたのに本ばかり読んでいる奴もないもんだ。たまには山の景色でも見ろよ。……」そう言いながら、向いに腰かけて、そちらがわの窓のそとへじつと目をそそぎ出した。

「だって、わたしなぞは、旅先きででもなければ本もゆっくり読めないんですもの。」妻はいかにも不満そうな顔をして僕のほうを見た。

「ふん、そうかな」ほんとうを云うと、僕はそんなことには何も苦情をいうつもりはなかった。ただほんのちよつとだけでもいい、そういう妻の注意を窓のそとに向けさせて、自分

と一しよになって、そこいらの山の端にまっしろな花を簇むらがらせている辛夷の木を一二本見つけて、旅のあわれを味ってみたかったのである。

そこで、僕はそういう妻の返事には一向とりあわずに、ただ、すこし声を低くして言った。

「むこうの山に辛夷の花がさいているとさ。ちょっと見たいものだね。」

「あら、あれをごらんにならなかったの。」妻はいかにもうれしくってしようがないように僕の顔を見つめた。

「あんなにいくつも咲いていたのに。……」

「嘘をいえ。」こんどは僕がいかに不平そうな顔をした。

「わたしなんぞは、いくら本を読んでいたって、いま、どんな景色で、どんな花がさいているかぐらいはちゃんと知っていますよ。……」

「何、まぐれあたりに見えたのさ。僕はずっと木曾川の方ばかり見ていたんだもの。川の方には……」

「ほら、あそこに一本。」妻が急に僕をさえぎって山のほうを指した。

「どこに？」僕はしかし其処には、そう言われてみて、やっとなんか白っぽいものを、ちらりと認めたような気がしたただけだった。

「いまのが辛夷こぶしの花かなあ？」僕はうつけたように答えた。「しよのない方ねえ。」妻はなんだかすっかり得意そうだった。「いいわ。また、すぐ見つけてあげるわ。」

が、もうその花さいた木々はなかなか見あたらないらしかった。僕たちがそうやって窓に顔を一しよにくつつけて眺め

ていると、目まなかいの、まだ枯れ枯れとした、春あさい山を背景にして、まだ、どこからともなく雪のとばっちりのようなものがちらちらと舞っているのが見えていた。

僕はもう観念して、しばらくじっと目をあわせていた。とうとうこの目で見られなかった、雪国の春にまっさきに咲くというその辛夷の花が、いま、どこぞの山の端にくっきりと立っている姿を、ただ、心のうちに浮べてみていた。そのまっしろい花からは、いしましたがたの雪が解けながら、その花の雫しずくのようにぽたぽたと落ちているにちがいがなかった。

浄瑠璃寺の春

この春、僕はまえから一種の憧れをもっていた馬酔木あしびの花を大和路のいたるところで見ることができた。

そのなかでも一番印象ぶかったのは、奈良へ著ついたすぐそのあくる朝、途中の山道に咲いていた蒲公英たんぽぽや薺なずなのような花にもひとり目に目がとまって、なんとなく懐かしいような旅びとらしい気分で、二時間あまりも歩きつづけたのち、漸やつとたどりついた浄瑠璃寺の小さな門のかたわらに、丁度いまをさかりと咲いていた一本の馬酔木をふと見いだしたときだった。

最初、僕たちはその何んの構えもない小さな門を寺の門だとは気づかずに危く其処を通りこしそうになった。その途端、その門の奥のほうの、一本の花ざかりの緋桃ひももの木のように、突然なんだかはつとするようなもの、——ふいとそのあたりを翔かけ去さったこの世ならぬ美しい色をした鳥の翼のようなものが、自分の目にはいつて、おやと思つて、そこに足を止めた。それが浄瑠璃寺の塔の錆さびついた九輪くりんだったのである。

なにもかもが思いがけなかった。——さつき、坂の下の一軒家のほとりで水菜を洗っていた一人の娘にたずねてみると、「九体寺くたいじやつたら、あこの坂を上りなはつて、二丁ほどだす」と、その家で寺をたずねる旅びとも少くはないと見えて、いかにもはきはきと教えてくれたので、僕たちはそのかなり

長い急な坂を息をはずませながら上り切つて、さあもうすこしと思つて、僕たちの目のまえに急に立ちあらわれた一かたまりの部落とその菜畑を何気なく見過ごしながら、心もち先きをいそいでいた。あちこちに桃や桜の花がさき、一めんに菜の花が満開で、あまつさえ向うの藁屋根わらやねの下からは七面鳥の啼なきごえさえのんびりと聞えていて、——まさかこんな田園風景のまつただ中に、その有名な古寺が——はるばると僕たちがその名にふさわしい物古りた姿を慕いながら山道を骨折つてやってきた当の寺があるとは思えなかつたのである。

……

「なあんだ、ここが浄瑠璃寺らしいぞ。」僕は突然足をとめて、声をはずませながら言った。「ほら、あそこに塔が見える。」

「まあ本当に……」妻もすこし意外なような顔つきをしていた。

「なんだかちつともお寺みたいではないのね。」

「うん。」僕はそう返事ともつかずに言つたまま、桃やら桜やらまた松の木の間などを、その突きあたりに見える小さな門のほうに向つて往つた。何処かでまた七面鳥が啼いていた。

その小さな門の中へ、石段を二つ三つ上がつて、はいりかけながら、「ああ、こんなところに馬酔木が咲いている。」と僕はその門のかたわらに、丁度その門と殆ど同じくらいの高さに伸びた一本の灌木かんぼくがいちめんに細かな白い花をふさふさと垂らしているのを認めると、自分のあとからくる妻のほうを向いて、得意そうにそれを指さして見せた。

「まあ、これがあなたの大好きな馬酔木の花？」妻もその灌木のそばに寄つてきながら、その細かな白い花を仔細しさいに見て

いたが、しまいには、なんということもなしに、そのふっさり垂れた一と塊りを掌のうえに載せたりしてみていた。

どこか犯しがたい気品がある、それでいて、どうにでもしてそれを手折って、ちよつと人に見せたいような、いじらしい風情をした花だ。云わば、この花のそんなところが、花というものが今よりかずつと意味ぶかった万葉びとたちに、ただ綺麗だけならもつと他にもあるのに、それらのどの花にも増して、いたく愛せられていたのだ。——そんなことを自分の傍でもってさつきからいかにも無心そうに妻のしだしている手まさぐりから僕はふいと、思い出していた。

「何をいつまでもそうしているのだ。」僕はとうとうそう言いながら、妻を促した。

僕は再び言った。「おい、こっちにいい池があるから、来てごらん。」

「まあ、ずいぶん古そうな池ね。」妻はすぐついて来た。「あれはみんな睡蓮ですか？」

「そうらしいな。」そう僕はいい加減な返事をしながら、その池の向うに見えている阿弥陀堂あみだどうを熱心に眺めだしていた。

阿弥陀堂へ僕たちを案内してくれたのは、寺僧ではなく、その娘らしい、十六七の、ジャケツト姿の少女だった。

うすぐらい堂のなかにずらりと並んでいる金色こんじきの九体くたい仏ぶつを一わたり見てしまうと、こんどは一つ一つ丹念にそれを見はじめている僕をそこに残して、妻はその寺の娘とともに堂の

そとに出て、陽あたりのいい縁さきで、裏庭の方かなんぞを眺めながら、こんな会話をしあっている。

「ずいぶん大きな柿の木ね。」妻の声がする。

「ほんまにええ柿の木やろ。」少女の返事はいかにも得意そうだ。

「何本あるのかしら？ 一本、二本、三本……」

「みんなで七本だす。七本ですが、沢山に成りまっせ。九体寺の柿やいうてな、それを目あてに、人はんが大ぜいハイキングに来やります。あてが一人で挽もいで上げるのだすがなあ、そのときのせわしい事やつたらおまへんなあ。」

「そうお。その時分、柿を食べにきたいわね。」

「ほんまに、秋にまたお出でなはれ。この頃は一番あきまへん。なあも無うて……」

「でも、いろんな花がさいていて。綺麗ね……」

「そうだす。いまはほんまに綺麗やろ。そやけれど、あこの菖蒲あやめの咲くころもよろしいおまっせ。それからまた、夏になるとなあ、あこの睡蓮が、それはそれは綺麗な花をさかせまっせ。……」そう言いながら、急に少女は何かを思い出したようにひとりごちた。「ああ、そやそや、葱ねぎとりにならんかった。」

「そうだったの、それは悪かったわね。はやく往ってらっしゃいよ。」

「まあ、あとでもええわ。」

それから二人は急に黙ってしまった。

僕はそういう二人の話を耳にはさみながら、九体くたい仏ぶつをすっかり見おわると、堂のそとに出て、その縁さきから蓮池の

ほうをいっしょに眺めている二人の方へ近づいていった。

僕は堂の扉を締めに行った少女と入れかわりに、妻のそばになんというともなしに立った

「もう、およろしいの?」

「ああ。」そう言いながら、僕はしばらくぼんやりと観仏に疲れた目を蓮池のほうへやっていた。

少女が堂の扉を締めおわって、大きな鍵を手にながら、戻ってきたので、

「どうもありがとう。」と言って、さあ、もう少女を自由にさせてやろうと妻に目くばせをした。

「あこの塔も見なはんなら、御案内しまっせ。」少女は池の向うの、松林のなかに、いかにもさわやかに立っている三重塔のほうへ僕たちを促した。

「そうだな、ついでだから見せて貰おうか。」僕は答えた。「でも、君は用があるんなら、さきにその用をすましてきたらどうだい?」

「あとでもええことだす。」少女はもうその事はけろりとしているようだった。

そこで僕が先きに立って、その岸へには菖蒲あやめのすこし生い茂っている、古びた蓮池のへりを伝って、塔のほうへ歩き出したが、その間もまた絶えず少女は妻に向って、このへんの山のなかで採れる筍たけのこだの、松茸まつたけだの話をことこまかに聞かせているらしかった。

僕はそういう彼女たちからすこし離れて歩いていたが、実によくしゃべる奴だなあとおもいながら、それにしてもまあ何んという平和な気分がこの小さな廃寺をとりまいているの

だろうと、いまさらのようにそのあたりの風景を見まわしてみたりしていた。

傍らに花さいている馬酔木あしびよりも低いくらいの門、誰のしわざか仏たちのまえに供えてあった椿の花、堂裏の七本の大きな柿の木、秋になってその柿をハイキングの人々に売のをいかにも愉たのしいことのようにしている寺の娘、どこからかときどき啼なきごえの聞えてくる七面鳥、——そういう此のあたりすべてのものが、かつての寺だったそのおおかたが既に廃滅してわずかに残っているきりの二三の古い堂塔をとりかこみながら——というよりも、それらの古代のモニュメントをもその生活の一片であるかのようにさりげなく取り入れながら、——其処にいかにも平和な、いかにも山間の春らしい、しかもその何処かにすこしく悲愴ひそうな懐古的気分を漂わせている。

自然を超えんとして人間の意志したすべてのものが、長い歲月の間にほとんど廃亡に帰して、いまはそのわずかに残っているものも、そのもとの自然のうちに、そのものの一部に過ぎないかのように、融け込んでしまうようになる。そうして其処にその二つのものが一つになって——いわば、第二の自然が発生する。そういうところにすべての廃墟の云いしれぬ魅力があるのではないか? ——そういうパセティックな考えすらも(それはたぶんジムメルあたりの考えであつたろう)、いまの自分にはなんとなく快い、なごやかな感じで同意せられる。……

僕はそんな考えに耽ふけりながら歩き歩き、ひとりだけ先きに石段をあがり、小さな三重塔の下にたどりついて、その松

林のなかから蓮池をへだてて、さっきの阿弥陀堂あみだどうのほうをぼんやりと見かえしていた。

「ほんまになあ、しよむないとこでおまつせ。あてら、魚食うたことなんぞ、とんとおまへんな。蕨わらびみてえなものばっかり食ってんのや。……筍はお好きだったか。そうだったか。このへんの筍はなあ、ほんまによろしうおまつせ。それは柔やわうて、やわうて……」

そんなことをまた寺の娘が妻を相手にしゃべりつづけているのが下の方から聞えてくる。——彼女たちはそうやって石段の下で立ち話をしたまま、いつまでたってもこちらに上がつて来ようともしない。二人のうえには、何んとなく春めいた日ざしが一ぱいあたっている。僕だけひとり塔の陰にはいつているものだから、すこし寒い。どうも二人ともいい気もちそうに、話に夢中になって僕のことなんぞ忘れてしまっているかのようだ。が、こうして廃塔といっしょに、さっきからいくぶん瞑想的めいそうてきになりがちな僕もしばらく世間のすべてのものから忘れ去られている。これもこれで、いい気もちではないか。——ああ、またどこかで七面鳥のやつが啼いているな。なんだか僕はこのまますこし気が遠くなってゆきそうだ。……

その夕がたのことである。その日、浄瑠璃寺から奈良坂を越えて帰ってきた僕たちは、そのまま東大寺の裏手に出て、三月堂をおとずれたのち、さんざん歩き疲れた足をひきずり

ながら、それでもせっかく此処まで来ているのだからと、春日かすがの森のなかを馬酔木の咲いているほうへほうへと歩いて往つてみた。夕じめりのした森のなかには、その花のかすかな香りがどことなく漂って、ふいにそれを嗅かいだりすると、なんだか身のしまるような気のするほどだった。だが、もうすっかり疲れ切っていた僕たちはそれにもだんだん刺戟しげきが感ぜられないようになりだしていた。そうして、こんな夕がた、その白い花のさいた間をなんということもなしにこうして歩いて見るのをこんどの旅の愉しみにして来たことさえ、すこしももう考えようとしなくなっているほど、——少くとも、僕の心は疲れた身体とともにぼおつとしてしまっていた。

突然、妻がいった。

「なんだか、ここの馬酔木と、浄瑠璃寺にあったのとは、すこしちがうんじゃない？ ここのは、こんなに真っ白だけれど、あそこのはもっと房が大きくて、うっすらと紅味を帯びていたわ。……」

「そうかなあ。僕にはおんなじにしか見えないが……」僕はすこし面倒くさそうに、妻が手ぐりよせているその一枝へ目をやっていったが、「そういえば、すこし……」

そう言いかけながら、僕はそのときふいと、ひどく疲れて何もかもが妙にぼおつとしている心のうちに、きょうの昼つかた、浄瑠璃寺の小さな門のそばでしばらく妻と二人でその白い小さな花を手にとりあって見ていた自分たちの旅すがたを、何んだかそれがずっと昔の日の自分たちのことでもあるかのような、妙ななつかしさでもって、鮮やかに、蘇よみがえらせ出していた。

橇の上にて

その小屋のなかで待っていてくれと云われるまま、しばらく五六人の馭者らしい人たちの間に割りこんで、手もちぶさたそうに炉の火にあたっていたが、みんなの吹かしている煙草にむせて急に咳が出たので、僕は小屋のそとに出て、これから自分のはいつてゆこうとする志賀山の案内図をながめたり、小さな雪がちらちらとふっているなかを何んとなく歩いてみたりしていた。雪の質は乾いてさらさらとしているし、風もないので、零下何度だか知らないけれど、寒さはそうひどく感ぜられなかった。そのうちに、向うの厩の中から、さいぜんの若い馭者が馬の口をとりながら、一台の雪橇を曳き出して来るのが見えた。僕は雪橇というものを始めて見た。――粗末な箱型をしたものに、幌とはほんの名ばかりの、継ぎはぎだらけの鼠いろの布を被っただけのものである。馭者台なんぞもない。それもそのはず、馭者は馬のさきに立って雪のなかを歩いてゆくのである。

その橇が自分の前に横づけになったものの、どこから乗っているのか分からないでまごまごしていると、馭者が飛んできて、幌をもちあげながら入口をあけてくれた。ふとそのなかに莫座の敷いてあるのが目にとまったので、僕はいそいで靴をぬこうとすると、その儘あがれという。そこで僕はほんのまね事のように外套を叩いたり、靴の雪を払い落したりし

て、首をこごめるようにして幌の中にはいった。そのなかはまあ二人で差し向いに腰かけるのがやっと位だが、そこには座蒲団や毛布から、火鉢の用意までしてある。火鉢には火もどっさり入れてある。――寒いから、その火鉢に足をのせて、その上からその毛布をかけよと云ってくれる。そう云うとおりに、僕がそこにあった毛布をひろげて膝の上にかけて出すのを見とどけると、馭者は幌をすっかり下ろして、馬のほうへ飛んでいった。

✻

やがて雪橇はごとんと動き出した。あまり揺られ心ちのいいものではなかった。それに幌には窓が一つもついていないので、全然おもての景色の見られないのが何よりの欠点だ。――このままこうしてごとんと揺られながら、毛布の中に小さくなっていたんでは、いくら寒さはしのげて、なんにも見えず、わざわざ雪のなかまでやってきたかいがない。そこで幌を少しもち上げてみたが、その位のことでは、道ばたに積みあげられた雪のほかは何んにも見えない。

……

が、さっきから首すじがすこし寒いとおもっていたが、そのところだけ幌の布がなんだか綻んだようになって、ひらひらしているのはじめて気がついた。ためしにそれをちよっと手でもち上げて見ると、小さな窓のような工合になる。僕はこれはいいとおもって、そこに目を近づけると、ちようど村の一番最後の家らしい、なかば雪に埋もれた一軒

の茶店のようなものが通り過ぎた。ちよつとの間だったのに、もうそうとう雪が深そうだ。

そのうちにあちこちの森だの山だのが見えて来る。細かい雪がいちめんにふりしきっているの、それもほんの近いものだけしか見えなかったが。……それでも、僕は自分が生れて初めて見るような雪の山のなかにはいり出していることを感じだしていた。だが、そうやって外ばかり眺めていると、そこから細かい雪がたえず舞いこんでくるとみえ、膝のうえの毛布がうっすら白くなっている。僕はその毛布を軽くはたきながら、すこし坐りなおして、しばらく目を休めることにした。なんにも見えなくとも、自分の身体のかしぎかたで、上りが急になったり、また、すこし楽になったりしてゆく工合がよく分かる。なんだか自分の不安定の感じが或る度を過してくると、櫓のほうもいつか止まってしまっている。馬が息をつくためにしばらく休むのである。雪の中にぼつんぼつんと立っている樹木なんぞを見ても、四方から雪を吹きつけられているので、どのくらい雪が深いのだからちよつと見当がつかない。櫓道はちゃんといっているらしいが、ずっと上りづめらしく、馬も、馭者も、ずいぶん骨を折っているのだらうと思った。

又、櫓がとまった。こんどはだいぶ長くとまっているな、と思っていると、雪の中から急におもいがけない話しこえが聞えた。どうやら向うから下りてくる雪櫓があつて、道をゆずりあっているらしい。――「まだあとからも来るか」と向うの馭者が問うと、

「いや、もうこれが最後だ」とこちらの馭者が答えている。

……そのうち僕の櫓が動きだして向うの櫓とすれちがおうとするとき、突然、向うの馭者が何かはげしく自分の馬を叱したので、ひよいと例の穴からのぞいて見ると、道を避けようとして片がわの積雪のなかへ深くはいり込んでしまった櫓を曳き出そうとして、一しよ懸命になっている馬は、ほとんど胸のあたりまで雪に埋っていた。なんども前脚を雪のなかから引き抜こうとしてば、そこらじゅうに雪煙りをちらしていた。僕もそのとばつちりを受けそうになって、いそいで顔をひっこめたが、向うの櫓はすっぽりと幌を下ろしてはいるものの、空のようだった。

続いて、もう一台の櫓とすれちがった。こんどはどうやらうまくすれちがったようだったが、それも空らしかった。

そうやって二台の櫓とすれちがって、しばらくしてから僕はふいと時計を出してみると、櫓に乗ってから一時間ばかりも経っているの、ああ、もうこんなに乗っていたのかと意外におもいながら、一体、いまどのへんなのだろうと、又、例の穴に顔を近づけてみると、ちよつと自分の櫓の通っている岨その、ずっと下のほうの谷のようなどころを二台の櫓がずんずん下りてゆくのが、それだけが唯一の動きつつあるものとして、いかにもなつかしげに見やられた。それにしても、あれがいましがた自分とすれちがった櫓かとおもわれる位、そんなにもう下のほうまで往っているのには驚いた。そうしてそれと共に、僕ははじめて自分のいつのまにかはいり出している山の深さに気がついてきた。それほど自分のそれまでの視野のうちには、いつまで経っても、同じような白い山、同じような白い谷、同じような恰好かつこうをした白い木立しかはい

って来ないでいたのだった。

✽

僕はそれから櫓のなかに再び坐りおして、がたんがたん揺られるがままになりながら、いよいよ自分も久恋の雪の山に來ているのだなとおもった。ずいぶん昔から、いまのように、こうしてただ雪の山のなかにいること、——それだけをどんなに自分は欲して來たことだろう。べつに雪の真只中でどうしようというのでもない。——スポルティフになれない弱虫の僕は、ただこういう雪の中にじっとして、真白な山だの（——そう、山もそんなに大それたものでなくとも、丁度いま自分の前にあるような小品風なものでいい……）、真白な谷だの（——谷もあの谷で結構……）、雪をかぶったいくつかの木立のむれ（——あそこに立っている樺^{かほ}のような木などはなかなか好いではないか……）などをぼんやり眺めてさえいればよかった。

ただすこし慾をいえば、ほんの真似だけでもいい、——真白な空虚にちかい、このような雪のなかをこうして進んでいくうちに、ふいと馭者も馬も道に迷って、しばらく何処をどう通っているのだからなくなり、気がついてみると、同じところを一まわりしていたらしく、さっきと同じ場所に出ている——そんな純粋な時間がふいと持てたらどんなに好かろう、とそんな他愛のないことだけが願わしいような、淡々とした気もちでいた。……

僕は目をつぶって、幌の穴から見ようとすれば見えたでも

あろう、そのような雪の世界をただ想像裡に描きつづけながら、こういう自分の雪に対するそれほど烈しくもない、いつて一時の気まぐれでもない、長いあいだの思慕のようなものが、いつ、どうして自分のなかに生じて來たのだろうかと考え出していると、突然、十年ほどまえ八つが岳^{ふもと}の麓にあるサナトリウムで生を養っていた自分のすがたが鮮かによみ返ってきた。冬になると、山麓^{さんろく}のサナトリウムのあたりは毎日ただ生氣なく曇っているだけなのに、山々はいつも雪雲で被われており、そんな雲のないときには、それらの山々は見事なほど真白なすがたをしていた。僕はそんな冬の日をどうしようもなしに暮らしながら、ときどき雪の山のほうへ切ない目ざしを向けるようになり出していた。そんな雪雲にすっかり被われている山のもなかを、なにか悲壮な人間の内部でも見たいように、おそろおそろ見たがりながら。……

僕は、いま、その頃の自分にはとても実現せられそうもないように見えていた、こんな雪の中にはいり込んで來ているのだと思いつながら、さて、べつにどうという感慨もなかった。悲壮のようなものはいささかも感ぜられなかった。寒さだつて大したことはない。むしろ、雪のなかは温かで、なんの音もなく、非常に平和だ。そう、愉^{たの}しいといったほうがいい位だ。櫓^{そり}の中にいて、小さな幌^{ほろ}の穴から、空を見あげていると、無数の細かい雪がしっきりなしに、いかにも愉しげな急速度でもって落ちてくる。そうやってなんの音も立てずに空から落ちてくる小さな雪をじっと見入っていると、その愉しげな雪の速さはいよいよ調子づいてくるようで、しみいにはどこか空の奥のほうでもって、何かごおっという微妙な

音といっしょになってそれが絶えず湧わいているような幻覚さえおこってくるようだ。

大きな壺に耳をあてていると、その壺の底のほうからごおつといて無数の音響が絶えまなしに湧きあがっている。

——ちやうどああいった工合に何か愉しくて愉しくてならないように、無数の小さな雪が空の奥のほうで微かにごおつという音を立てながら絶えず湧いているような気がせられるのである。僕はいつまでも一ところからじっと、絶えず落ちてくる雪を見ている中に、そんな幻覚的な気もちにさえなり出していたが、急にまた坂にさしかかったと見えて櫂かががたんがたん揺れだしたので、思わず自分自身に立ち返えされてしまった。

……雪のごとく愉しかれ。

大いなる壺のやすらかに閉ざされし内部に在りて、

すべての歌声の、よろこばしきアルペジオとなりて、

絶えず湧きあがるがごとくにあれ。

そうしてそういうノワイユ夫人の詩の一節だけが、いつまでも自分の口の裡うちに、なにか永遠の一片のように残っていた。

……

「死者の書」

古都における、初夏の夕ぐれの話

客　なんともいえず好い気もちだね。すこし旅に疲れた体をやすめながら、暮れがたの空をこうやって見ているのは。

主　京都もいまが一番いいんだ。この頃のように澄み切った空のいろを見ると、すっかり京都に住みついていて僕なんぞも、なんだかこう旅さきにいるような気がしてきてならないね。まあ、そういう気もちになるだけでもいいからな……それにしても、君はこの頃はよくこちらの方へ出てくるなあ。いつか話していた仕事はその後はどこでしているのかい。何か、大和のことを書くとかいつていたが……

客　いや、あれはあのままだ。なかなか手がかりがつかないんだ。まあ、そのうち何んとかものにするよ。……なんしろ、まだ、こういった感じのものが書きたいと、埴輪をいじったり、万葉の歌を拾い読みしたりしては一種の雰囲気をつ分のまわりに漂わせて、ひとりでもいい気になっているぐらいのものだ。

……当分はまあ折を見ては、こうやってこちらに来て、できるだけ^{しばしば}田園と化した都^{みやこ}址や、西の京あたりの松林のなかなどをぶらぶらするようにしている。

主　そうやって君は何げなさそうにぶらぶらしながら、突然、松林の奥から古代の風景が君の前にひらけるような瞬間

を待っているわけなのだね。

客　そうだよ。少くとも、はじめのうちはそうだった。だが、このごろはそういった奇蹟は^{あきう}詮めてゐる。まだ、自分には古代の研究がなにひとつ身についていないのだからね。もうすこしおとなしく勉強をする。

主　だが、こんなことを僕から君に云うのもどうかと思うけれど、小説を書く気なら、あんまり勉強しすぎてしまってもいけないのではないかしら。ゲエテも、どこかで、こんなことを云っている。『自分はギリシヤ研究のおかげで「イフィゲニエ」を書いたが、自分のギリシヤ研究はすこぶる不完全なものだった。もしその研究が完全なものだったら、自分の「イフィゲニエ」は書かれずにしまったかも知れない。』

客　うん、なるほどね。つまり、古代のことは程よく知っている位で、非常にういういしい憧れをもっているうちのほうが小説を書くのにはいいということになるわけか。これは好い言葉をきいた。……どうもこのごろ、自分でも悪い癖がついたとおもい出していたところだ。日本の古代文化の上にもはつきりした痕^{あと}を印しているギリシヤやペルシヤの文化の東漸ということを考えてみるうち、いつか興味が動きだしてギリシヤの美術史とか、ペルシヤの詩だとか読み出している。それはまだいい、そのうちにいつのまにかゲエテの「ディヴァン」だとか、ノヴィユ夫人の詩集までが机の上にもち出されているといった始末だ。

主　（同情に充ちた笑）まあ、ゆっくりでもいいから、あまり道草をくわずに、仕事に精を出したまえ。……そういえば、数年まえに釈迦空さんが「死者の書」というのを書いて

いられたではないか、あの小説には実によく古代の空氣が出ていたようにおもふね。

客 そう、あの「死者の書」は唯一の古代小説だ。あれだけは古代を呼吸しているよ。まあ、ああいう作品が一つでもあってくれるので、僕なんぞにも何か古代が描けそうな氣になつてゐるのだよ。僕ははじめて大和の旅に出るまえに、あの小説を読んだ。あのなかに、いかにも神秘的な姿をして浮かび上がつてゐる葛城の二上山には、一種の憧れさえいだいて来たものだ。そうして或る晴れた日、その麓にある当麻寺までゆき、そのごしい山を何か切ないような氣もちでときどき仰ぎながら、半日ほど、飛鳥の村々を遠くにながめながらぶらぶらしてゐたこともあつた。

主 その二上山だ。その山に葬られた貴い、お方の亡き骸が、塚のなかで、突然深いねむりから村びとたちの魂乞いによつて呼びさまされるあたりなどは、非常に凄かつたね。森の奥の、塚のまっくらな洞のなかの、ぼたりぼたりと地下水が巖づたいにしたり落ちてくる湿っぽさまでが、何かぞつとするように感ぜられた。

客 全篇、森嚴なレクキエムだ、古代の埃及びとの数種の遺文に与えられた「死者の書」という題名が、ここにも実にいきいきとしてゐる。

主 毎日の写經に疲れて、若い女主人公がだんだん幻想的になつて来、ある夕方、日の沈んでゆく西のほうの山ぎわにふと見知らない貴いおかたの^{おもかげ}俤を見いだすところなども、まだ覚えてゐる。

客 あの写經をしている若い女のすがたは美しいね。僕は

あそこを読んでからは女の手らしい古い写經を見るごとに、あの藤原の郎女の氣高くやつれた容子をおもひ出して、何んとなくなつてかしくなる位だ。

主 あの小説には、それからもう一つ、別の興味があつた。大伴家持だ。柳の花の飛びちつてゐる朱雀大路を、長安かなんぞの貴公子然として、毎日の日課に馬を乗りまわしてゐる兵部大輔の家持のすがたは何んともいえず愉しいし、又、藤原仲麻呂がその家持と支那文学の話などに打ち興じながら、いつか話題がちかごろ仏教に帰依した姪の郎女のうえに移つてゆく会話なども、いかにもいきいきとしてゐたな。

客 そういうところに作者の底力がひとり出てゐる。人間として大きな幅のある人だ。

主 一方、万葉学者としてもつとも独創に富んだ学説をとなえてきた、このすぐれた詩人が、その研究の一端をどこまでも詩的作品として世に問うたところに、あの作品の^{ユマニティ}人性があるのだね。だが、どうしてあれほどのものが世評に上らなかつたのだろう。

客 世間はそういう仕事は簡単にディレッタンティズムとしてかたづけしてしまうのだ。学界の連中は、こんどは小説という微妙な形式なので、読まずともいいとおもつたらうし……：本当にこの作品を読んだという人は、僕の知つてゐる範圍では、五人とはいひなかつたものね。

主 僕などもその一人だつたわけか。幸福なる少数者の……：しかし、それはそれだ。君もいい仕事をしてくれたまえ。いい読者になつてあげるから。

客 こんどはこっちに風が向いてきたな。まあ、もうすこ

し待ってくれ。まだ自分でもしやうがないとおもうのは、大和の村々を歩いていると、なんだかこう、いつもお復習をさせられているような気もちが抜けないことだ。もうすこし何処にいるのだから忘れたようになって、あるときは初夏の風にふかれながら、あるときは秋の雲をみあげながら、ぼんやりと歩けるようになりたい。——心におそろしげに描いてきた神々のいられた森が何かつまらない小山に見えるきりだったり、なにげなく見やっていた或る森のうえの塔に急に心をひかれ出して暑い田圃のなかを過ぎっていったり、或る大寺の希臘風なエンタシスのある丹のはげた円柱を手で撫でながら、目のあたりに見る何か大いなるものの衰えに胸を押しつぶされたり、そうかとおもうと、見すてられたような廃寺の庭の夏草の茂みのなかから拾い上げた瓦がよく見ると明治のやつだったりして、すっかりへとへとになって、日ぐれ頃、朝からみると自分の仕事からかえって遠のいた気もちになつて帰ってくることが多いのだ。

主　　そういった君の日々が、そのまま君の小説になるのではないか。

客　　いや、もうそういう苦しまぎれのような仕事はこんどだけはしたくない。もっと、こう大どかな仕事ぶりをしてみたいんだ。だが、僕みたいなものには難しいことらしいな。

——あれは、おとしの秋だったかな、ともかくもまあ小手しらべにと、何か小品を、ちょうど古代の人々がふいとした思いつきで埴輪をつくりあげたような気もちで、書いてやろうとおもって、古代の研究がてら、大和にやってきて、毎日寺々を見て歩いているうちに、なんだか日にまし気もちが重

くるしくなつて、とうとう或る夕方、もうその仕事をどう云ってやってことわろうかと考えるため散歩にいった高畑のあたりの築土のくずれが妙にそのときの自分の気もちにぴたりして、それから急に思いついて「曠野」という中世風なものがない物語を書いた。

主　　あの小説は読んだよ。大和までわざわざ仕事をしにきて、毎日お寺まわりしながら、やっぱり、ああいうものを書いてるなんて、いかにも君らしいとおもつたよ。

客　　あれは、いまおもえば、僕のさびしい詮めだった。それが何処かで、あの物語の女のさびしい気もちと触れあつていたのだな……

主　　そういえばそうもいえようが、あれもあれでいい。だが、僕は君の新らしい仕事を期待している。勇気を出して、いつまでもその仕事をつづけてくれたまえ。

客　　うん、ありがとう。ひとつ一生をかけてもやるかな。

……それまでのうちに、これから何遍ぐらいこつちにやってくることになるかな。どうも大和のほうに住みつこうなんという気にはなれない。やっぱり旅びととして来て、また旅びととして立ち去ってゆきたい。いつもすべてのものに対してニイチエのいう「遠隔の感じ」を失いたくないのだ。……

そのくせ、いつの日にか大和を大和とおもわずに、ただ何んとなくいい小さな古国だとおもう位の云い知れぬなつかしきで一ぱいになりながら、歩けるようになりたいとおもっているのだ。たわなに柑橘類のみのった山裾をいい香りのかいで歩きながら、ああこれも古墳のあとかなと考え出すのは、どうもね。

主　しかし、君はもう大抵大和路は歩きつくしたろうね。
客　割合に歩いたほうだろうが、ときどきこんなところだと、——本当に思いがけないような風景が急に目のまえにひらけ出すことがある。

この春も春日野の馬酔木の花ざかりをみて美しいものだとおもったが、それから二三日後、室生川の崖のうえにそれと同じ花が真っ白にさきみだれているのをおやと思つて見上げて、このほうがよっぽど美しい気がした。大来皇女の挽歌にある「石のうへに生ふる馬酔木を手折らめど……」の馬酔木はこれではなくてはおもった。そういう思いがけない発見がときどきあるね。まあ、そんなものだけをあてにして、できるだけこれからも歩いてみるよ。——だが、まだなかなか信濃の高原などを歩いていて、道ばたに倒れかかっている首のもぎとれた馬頭観音などをさりげなく見やって、心にもとめずに過ぎてゆく、といったような気軽さにはいかない。：

それでいて、そのふと見過ごしてきた首のない馬頭観音の像が、何かのはずみで、ふいと、そのときの自分の旅すがたや、そのまわりの花薄や、その像のうえに青空を低くさらさらと流れていた秋の雲などと一しょになって、思いがけずはつきりと蘇よみがえってくるようなことがあったりする工合が、信濃路ではたいへん好かった。なんだか、そういったうつけたような気分で、いつの日か、大和路を歩けるようになりたいものだ。

主　いい身分だね。そうやって旅行ばかりしていられるなんて。

客　君なんぞにもそう見えるのかい。でも、僕はこんな弱虫だからね、不安な旅でない旅などをしたことはない。いつ、どこで、寝こむかも分からないような心細さで、旅に、出てくるのだよ。まあ、それなりにだんだん旅慣れてはきたけれど。……

主　そうか。あんまり無理をするなよ。——ああ、もうすっかり暗くなってしまったね。すこし冷え冷えとしてきたよ。うだから、窓をしめようね。